

# 新築完成予想図が掲載される 昭和 30～40 年代のホテルパンフレットについて

河村 英和

On the Japanese Architectural Renderings Published  
in Hotel Brochures from the 1960s and 1970s

Ewa KAWAMURA

要旨： 昭和 30～40 年代のホテルパンフレットには、建物の完成予想図（建築パース）が掲載されることが少なくない。それは高度経済成長期のレジャーブーム、1964 年の東京オリンピック、1970 年の大阪万博、1972 年の札幌オリンピックで引き起こされたホテル新築ラッシュの時期と重なっている。ホテルの内外観を描いた建築パースには、設計者たち・ホテル運営者たちの愛着や意気込みがじかに感じられ、時代特有の建築美と文化の歴史的証人としての役割も見出せる。本稿では 1950 年代後半から 1974 年までに開業した主なホテルを時系列順に整理して、それに呼応する建築パース付きのホテルパンフレットの事例を提示し、当時のホテル建築の特徴と傾向を浮き彫りにしつつ、メディアのひとつとして機能していたホテルパンフレットの歴史的建築資料価値を認識する。

キーワード： ホテル建築、ホテルパンフレット、完成予想図（建築パース）、モダニズム

## 1. はじめに：建築のイラストやパース（透視図）が掲載される初期のホテルパンフレット

ホテルパンフレットの主たる視覚情報源は、外観・内観を写した「写真」であるのはいつの時代も変わらない。しかしときに、あえて写真ではなく「絵」が掲載されることもある。例えば、画家やイラストレーターがホテルの姿を描いた水彩や油彩絵画・イラストを掲載することによって、ピクチャレスクな情緒や親近感、愛着を掻き立てる効果を狙う場合だ。また、開業時前後にパンフレットを配布しようとするとき、写真撮影を間に合わせるのが困難なため、建築家や設計事務所が設計時に作成する建築の「完成予想図（パースバクティヴな透視図であることから、通称「建築パース」とも呼ばれる）」を掲載させることもある。

本稿では、このような水彩やアクリル絵の具で描かれた外観・内観の完成予想図（建築パース）が掲載されていた日本のホテルパンフレットに焦点を当て、その流行と時代的変遷を追ってゆく。対象事例としたのは、筆者が収集したホテルパンフレットの一部分であるが、1960～70（昭和 35～45）年代のものにホテルの完成予想図（建築パース）の掲載が集中する傾向があることが分かっている。それは明らかに 1964（昭和 39）年の東京オリンピックと 1970（昭和 45）年の大阪万博の集客を見込んだホテル新築ラッシュの時期と重なっている。その一方、1950（昭和 25～35）年代のパンフレットは建築パースよりもイラストのほうが好まれていたようで、建築パースのときでもラフなデザイン風のものが多い。

1950 年代からカラー印刷の豪華なホテルパンフレットの発行が増えてくるが、その理由は、1951（昭和 26）年、連合国の占領政策が終わり、米軍に接収されていた高級ホテル群が解放されて一般客を迎えられるようになるのと、戦後の高度経済成長の好景気がレジャーブームを引き起こしてホテル需要が増えてきたからだろう。

新築ではなくすでに戦前に建ったホテルのパンフレットでは、設計図や完成予想図は戦災で残っていないこともあ

る。それぞれの町を代表するような、すでに周知されている定評あるホテルであれば、わざわざ精緻な建築パースを使用するよりも、愛らしさ溢れるイラストで充分ホテルの宣伝になっただろう。つまり戦前創業の高級ホテルの1950年代に刊行されたパンフレットでは、イラストが使用されることが珍しくなかった。例えば、1928（昭和3）年10月竣工のアルデコ様式建築の「京都ステーションホテル<sup>(1)</sup>」の戦後に発行された二つ折りパンフレットでは、日本語版表紙は白黒のデッサン画のホテル外観、英語版の表紙はカラー水彩のホテルを含む風景画、パンフレット見開き部分はホテル内観の水彩イラストが描かれている（図1-1）。同じく1928年2月に竣工したスパニッシュ様式の洋風建築の「京都ホテル<sup>(2)</sup>」の1950年代の観音折りパンフレットでは、内部に外観の全体像が分かる建築パースも1点掲載されているが、表紙には建物エントランス部分をクローズアップした水彩画、見開きには近隣アクセスがわかるように、子供が見ても楽しそうな絵地図が掲載された（図1-2）。このような表紙にホテルの外観イラストがあり、見開きに絵地図を置いたレイアウトの観音折りのパンフレットは、ある種の雛形となって複数のホテルでも似たようなものが作成された。例えば、1954（昭和29）年に開業した「博多日活ホテル<sup>(3)</sup>」のパンフレットも同じように観音折りで、表紙にイラスト調のホテル外観の風景画、最初の見開きに可愛らしいイラストの絵地図が出てくるように配されていて（図1-3）、同時期の他のホテルのパンフレットでもこのパターンが散見される。

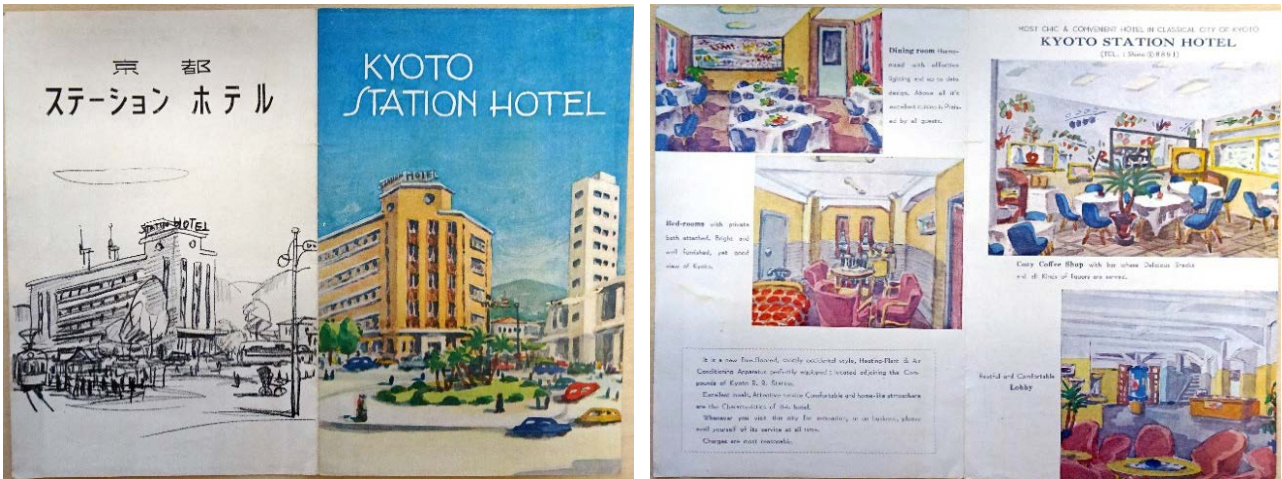


図1-1：イラスト調の内外観パースを載せた「京都ステーションホテル」の二つ折りパンフレット（筆者蔵）



図1-2：表紙に外観の風景画、最初の見開きに絵地図が出る「京都ホテル」の観音折りパンフレット（筆者蔵）



楽しいカラーイラストは、見る者に旅路へ心浮き立たせるシンパシーを喚起させるだろうが、パンフレットが伝えるべきホテルの建物・室内空間の正確な視覚情報は、写真や建築パースのほうが分かり易い。よってイラストだけではなく写真も同時に載せるのは効果的である。例えば、名古屋で1955（昭和30）年に開業した「ホテルニューナゴヤ<sup>(4)</sup>」の当時のパンフレットでは、表紙には全体像ではない建物外観の一部分だけのラフな水彩のイラスト、4面見開き部分には内観写真と内装のラフスケッチ調の建築パースが掲載された（図1-4）。

1950年代はホテルだけでなく、山岳ロッジのパンフレットにおいても完成予想図（建築パース）がよく使用されるようになった。戦前は1940（昭和15）年に予定して開催中止になった幻の東京オリンピックに備え、1930年代後半に快適で立派なホテルが国策で数多く建設されたが（砂本, 2008）、快適な山岳ロッジは、宿泊施設の戦後の新ジャンルとして、建築の完成予想図をパンフレットに掲載することに格別の意気込みがあったことがうかがえる。例えば、群馬県の赤城山の山頂には、東武電車（現・東武鉄道）によって、1956（昭和31）年に「赤城ロッジ」が開設されるが<sup>(5)</sup>、そのパンフレットの表紙は外観写真ではなく、手描きの完成予想図の建築パースが使用された（図1-5：左）。奈良の<sup>たかまどやま</sup>高円山に1959（昭和34）年に開設された「高円山ロッジ<sup>(6)</sup>」のパンフレットでも、ラフなデッサン調の外観の完成予想図が掲載されている（図1-5：右）。



図1-3：表紙に外観の風景画、最初の見開きに絵地図が出る「博多日活ホテル」の観音折りパンフレット（筆者蔵）

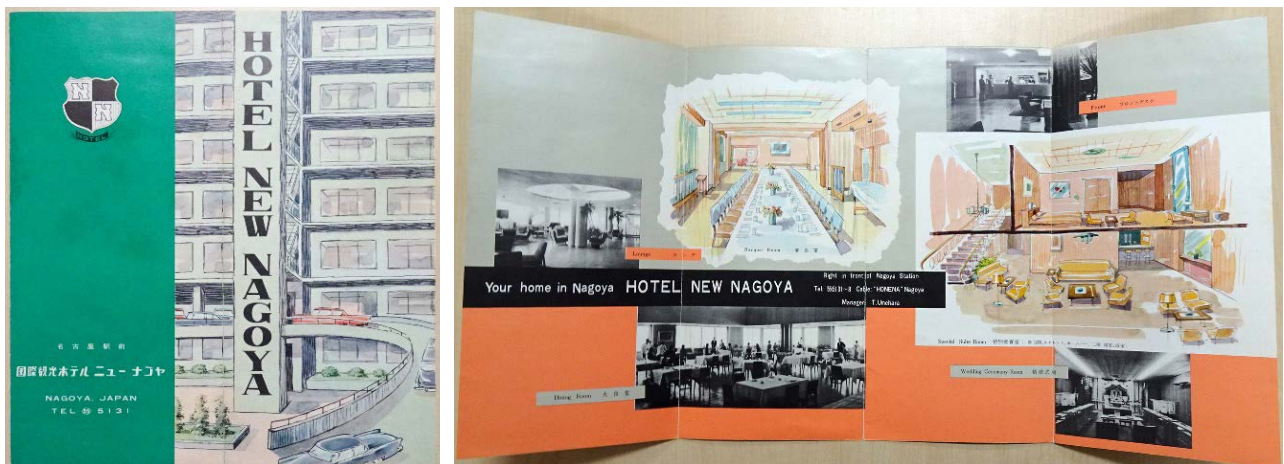


図1-4：外観のイラストと内観のラフ建築パースが載った「ホテルニューナゴヤ」の観音折りパンフレット（筆者蔵）

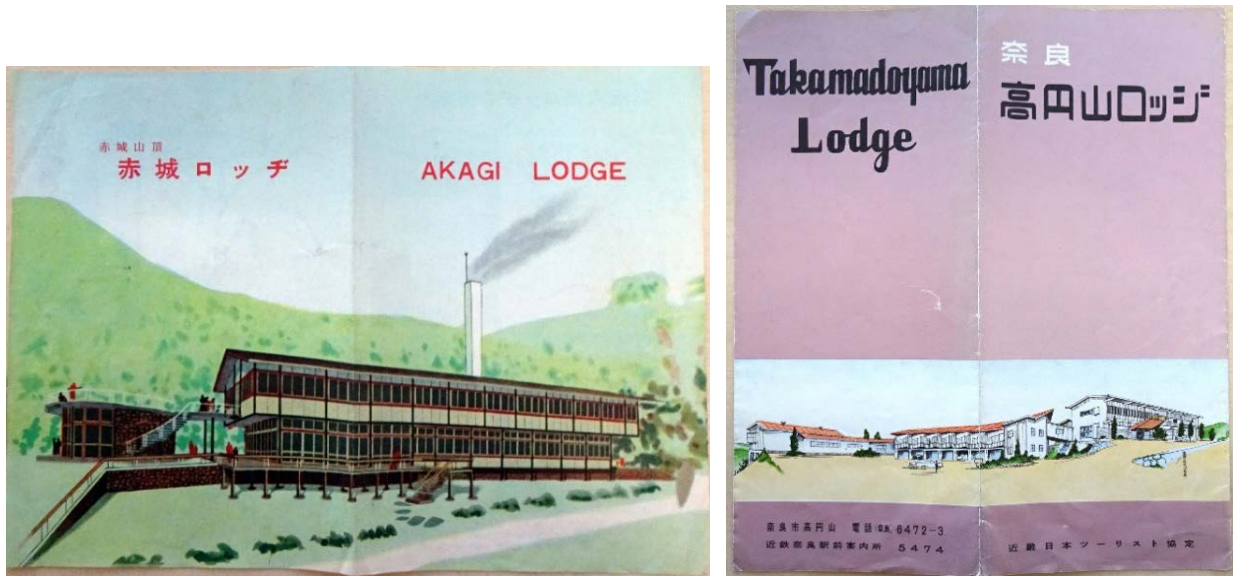


図 1-5：開業当時の「赤城ロッヂ」の二つ折りパンフレットの表紙に使用された外観の建築パース（左）；開業当時の「高円山ロッヂ」の二つ折りパンフレットの表紙に使用された外観の建築パース（右）（いずれも筆者蔵）

## 2. 1964 年東京オリンピック開催前後に開業したホテルのパンフレット

### (1) ホテル竣工記念冊子とパンフレットの興隆

1959（昭和 34）年 5 月、独ミュンヘンで行われた国際オリンピック委員会（IOC）総会にて、1964（昭和 39）年 10 月に東京でオリンピックを開催することが合意された。これは戦後日本における最初のホテル建設ラッシュを巻き起こした。さすがに 1959 年に開業したホテルは、まだ知る由もなかったオリンピック開催需要の影響下で建設されるには早い。高度経済成長に付随して到来したレジャーブームによる旅館とホテルの開業ラッシュは、1950 年代後半よりすでに起こり始めていた。当時の経済成長の勢いは神懸かっているほどとされ、1954～57（昭和 29～32）年の好景気は、紀元前の神武天皇に因んで「神武景気」、1958～61（昭和 33～36）年の好景気は、天照大御神の岩戸隠れ以来として「岩戸景気」のような大和魂みなぎる命名がなされた。そんな岩戸景気の只中である 1959（昭和 34）年中に開業した主なホテルに、東京では「ホテル日航」と「都市センターホテル」があり、京都では「比叡山国際観光ホテル<sup>(7)</sup>」、スキーリゾートでは「白馬東急ホテル<sup>(8)</sup>」や「ホテル志賀サンバレー」があった（重松, 1966, 108; 163; 167; 181）。

1960 年、初のジェット旅客機「ダグラス DC-8」型が就航するが、そのような航空旅行時代に合わせて 1959 年 12 月 1 日銀座に開業した「ホテル日航<sup>(9)</sup>」は、日本航空ホテル株式会社を施主として、芦原義信の設計、間組の施工で<sup>(10)</sup>、綴じ紐付きの A4 判の竣工記念用の冊子が関係者に配られた。これは豪華版パンフレットの役割も果たしていただろう。巻頭辞には間組の当時の社長、神部満之助のことが寄せられ、主要な各部屋の建築パースや平面図が複数掲載されている（図 2-1）。

1960（昭和 35）年には、都内では「銀座東急ホテル<sup>(11)</sup>」と「ホテルニュージャパン<sup>(12)</sup>」、「西熱海ホテル<sup>(13)</sup>」、「箱根観光ホテル<sup>(14)</sup>」、「ニュー長崎ホテル<sup>(15)</sup>」、「グランドホテル仙台<sup>(16)</sup>」、「四日市ステーションホテル<sup>(17)</sup>」、「熊本キャッスルホテル<sup>(18)</sup>」が開業している（重松, 1966, 207）。この頃より、数多くの新築ホテルの開業時のパンフレットに、完成予想図の建築パースがよく掲載されるようになってきた。東急ブランドホテルの第一号店となった「銀座東急ホテル」では、5 月の開業に合わせて、関係者向けの A4 判のスパイラル綴りの竣工記念冊子が発行され、各ページ内部には外観・内観各エリアの完成予想図の建築パースがふんだんに盛り込まれた（図 2-2）。表紙は外国人客を意識して「GINZA TOKYU HOTEL TOKYO OPENING MAY 1960」と英文で書かれ、能の翁面と扇子の写真が載せられているので<sup>(19)</sup>、内外の要人向けの豪華なパンフレットとしても使用されていたようだ。内装にも外国人が好みそうな和を意識した意匠が施されていた。例えば 1 階ロビーには、京都の一乗寺の詩仙堂の鹿威し（山田僧都）から着想された鹿



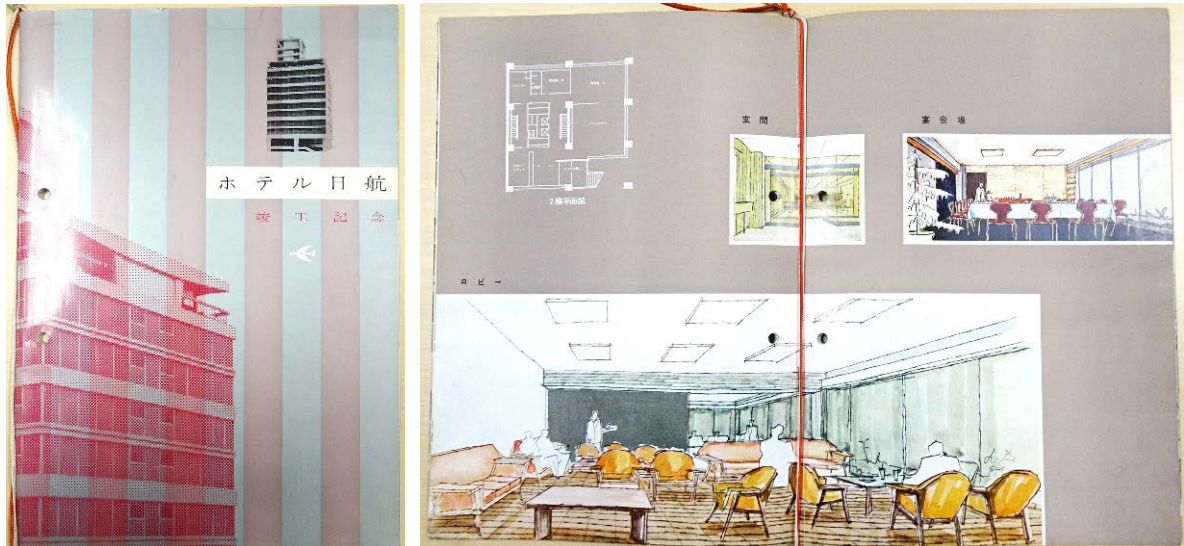


図 2-1：完成予想図の建築パースが随所に掲載された「ホテル日航」の竣工記念冊子（筆者蔵）



図 2-2：完成予想図の建築パースが多数掲載された「銀座東急ホテル」の竣工記念冊子（筆者蔵）

威し付きの水槽が置かれ、食堂には棟方志功の原画による綴錦の壁画「華曆」が飾られた。設計は東急電鉄株式会社と久米建築事務所（現・久米設計）によるものであった。

1961（昭和 36）年以降に開業するホテルは、オリンピック需要も勘案して計画されたホテルである。東京・丸の内のできた最高級ホテル「パレスホテル<sup>20)</sup>」をはじめ、「京都国際ホテル<sup>21)</sup>」、「秋田ニューグランドホテル<sup>22)</sup>」、「新潟東映ホテル」、「釧路東映ホテル<sup>23)</sup>」、「千葉京成ホテル<sup>24)</sup>」、「天城日活ホテル<sup>25)</sup>」、白浜の「ホテルパシフィック<sup>26)</sup>」が、この年に開業した主なホテルである（重松, 1966, 213）。ホテル竣工記念の豪華冊子の興隆も 1960 年ごろから始まった。大手ゼネコン各社がホテルの設計・施工を請け負い、「パレスホテル」を担当していた竹中工務店は、正方形の大判の竣工記念冊子を発行して、完成予想図の建築パースを数多く使用して各部屋の説明を行った（図 2-3）。

日活や東映といった大手映画製作会社がホテル事業を展開したのもこの時代の特徴で、「釧路東映ホテル」の三つ折りパンフレットでは、表紙に完成予想図の外観パース、折り込み内部には宴会場とジングスカン料理のレストランの内装パースが掲載されている（図 2-4）。外観図像に実際の写真を用いると、電柱や近隣の建物や自動車など遮蔽物も写り込んでしまい、建物の姿形が分かりにくいこともあるが、建築パースであれば、建物全体を理想的に描くことができるので、国家イベントに向けて意気揚々と開業する 1960～70 年代ホテルのパンフレットが、写真を用いずに建築パースを重点的に掲載することが多いのは頷ける。

1962（昭和 37）年に開業した主なホテルには、東京では「ホテルオークラ（のちホテルオークラ東京、現・The Okura Tokyo）」、北九州の「小倉ホテル<sup>27)</sup>」、「小倉日活ホテル<sup>28)</sup>」、「大洗パークホテル<sup>29)</sup>」、「下田東急ホテル」、鳥羽



図2-3：建築パースが多数掲載された「パレスホテル」の竣工記念冊子の見開きページの例（筆者蔵）



図2-4：完成予想図の建築パースが載った「釧路東映ホテル」の三つ折りパンフレットの表紙面の部分（左）と見開き内部の部分（右）（いずれも筆者蔵）

の「ホテルニュー美しま<sup>30)</sup>」、「金沢都ホテル<sup>31)</sup>」、「広島グランドホテル<sup>32)</sup>」、「横浜東急ホテル<sup>33)</sup>」、別府の「日名子ホテル<sup>34)</sup>」、岡山の「ホテルニューオカヤマ<sup>35)</sup>」があるが（重松, 1966, 247）、東京の高級ホテルの代名詞ともなった「ホテルオークラ」の開業当時の英語版パンフレットでも、建築パースがふんだんに使用されている。設計・施工は大成建設であるが、設計には特別に委員会が設けられ、谷口吉郎をはじめとする数多くの建築家が関わっていた。和を用いたデザインへの自信とこだわりは、開業当時の「ホテルオークラ」のDM折り（2つ折りと3つ折りを組み合わせた折り方）パンフレットの表紙部分には外観パース、開いた面には通算10点もの潇洒な内観パースが掲載されていることからもうかがえる（図2-5）。

1962年10月8日の開業を伝える「下田東急ホテル」の二つ折りパンフレットも、図像に写真を使用せず、外観の建築パースのみで構成された。裏面に載せた同東急チェーンホテル（銀座、横浜、白馬、軽井沢）の紹介でも、外観写真ではなくラフスケッチ風のペン画の外観パースである（図2-6）。

ホテルの急速な増加もあって1963（昭和38）年には、『観光基本法』が制定された。この年に開業したホテルは、日本初の外資系ホテル上陸となったヒルトンの第一号店「東京ヒルトンホテル<sup>36)</sup>」、大阪の「新阪急ホテル<sup>37)</sup>」、「名古屋都ホテル<sup>38)</sup>」、「天橋立ホテル<sup>39)</sup>」、「有馬グランドホテル」、「倉敷国際ホテル」、「ホテル新潟<sup>40)</sup>」、山中湖の「ホテル



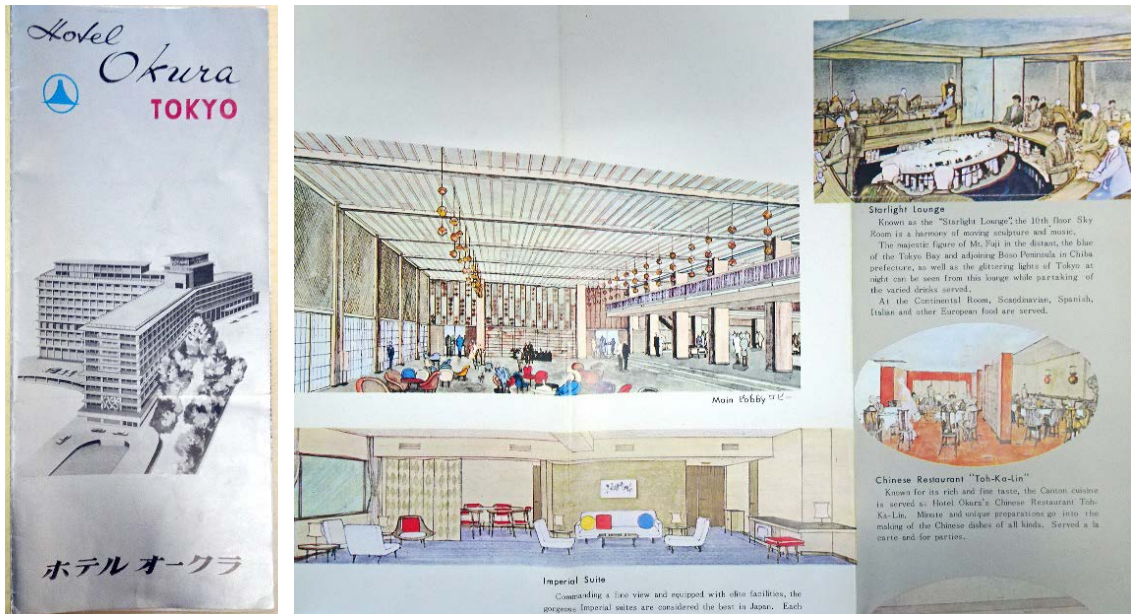


図 2-5：数々の建築パースが掲載された開業当時の「ホテルオークラ」の DM 折りの英語版パンフレットの表紙面（左）と見開き内部の部分（右）（筆者蔵）

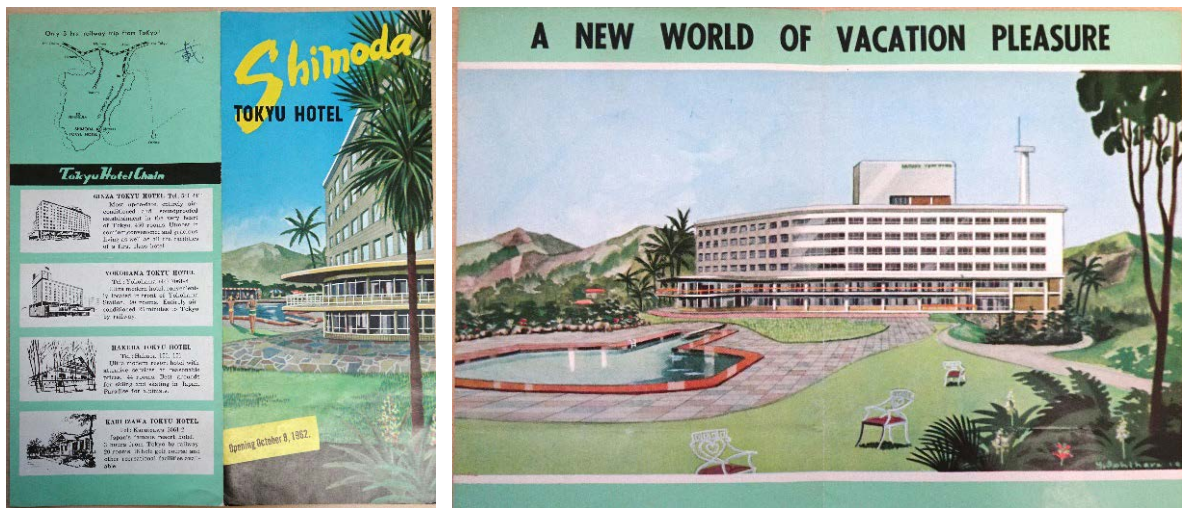


図 2-6：建築パースを掲載した「下田東急ホテル」開業当時の二つ折り英語版パンフレットの表紙と裏面（左）と見開き内部の部分（右）（筆者蔵）

マウント富士<sup>(41)</sup>、「土浦京成ホテル<sup>(42)</sup>」であった（重松, 1966, 252-253）。なかでも、村野藤吾のような一流建築家が設計した「名古屋都ホテル」の開業当時の DM 折りのパンフレットは、当然のように完成予想図の美しい建築パースだけで構成されたもので、表紙には外観、見開きには内観パースが 6 点掲載された（図 2-7）。

東京オリンピックが開催され、東海道新幹線も開通した 1964（昭和 39）年に創業したホテルのラインナップは華々しい。日本最高層建築を記録した「ホテルニューオータニ」、「ホテル高輪<sup>(43)</sup>」、「羽田東急ホテル<sup>(44)</sup>」、「川崎日航ホテル<sup>(45)</sup>」、「名古屋国際ホテル<sup>(46)</sup>」、本邦初のヨットハーバー付きの「ホテル葉山マリーナ<sup>(47)</sup>」、熱川温泉の「熱川第一ホテル<sup>(48)</sup>」、「日本平観光ホテル<sup>(49)</sup>」、「高山観光ホテル」、「鳥羽国際ホテル」、「姫路新大阪ホテル<sup>(50)</sup>」、「ホテル三愛（現・札幌パークホテル<sup>(51)</sup>）」、「札幌ロイヤルホテル<sup>(52)</sup>」、洞爺湖の「ホテル大東<sup>(53)</sup>」、「京都タワーホテル」、南紀勝浦温泉の「ホテル浦島<sup>(54)</sup>」、「ニュー平戸海上ホテル<sup>(55)</sup>」、「犬吠埼京成ホテル（現・犬吠埼ホテル<sup>(56)</sup>）」が主なものである（重松, 1966, 268-269; 323-324）。

オリンピック開催年に開業したホテルの建築熱はひとしおで、パンフレットにホテルの完成予想図を掲載することは、写真撮影が時間的に間に合わなかったこともあるかもしれないが、誇りをもって最先端のホテル建築の外観・内





図2-7：建築パースだけで構成された「名古屋都ホテル」開業当時のDM折りパンフレットの表紙と裏面（左）と見開き内部の部分（右）（筆者蔵）

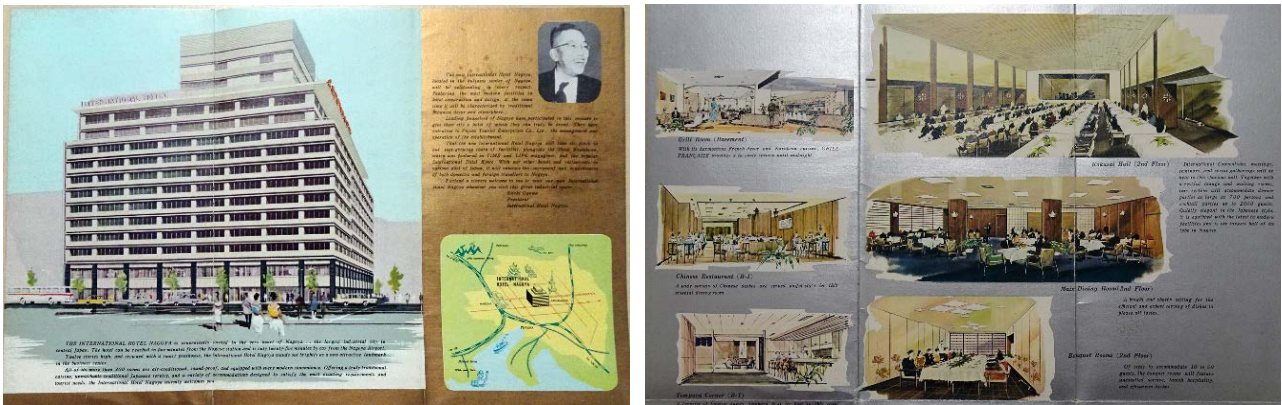


図2-8：完成予想図の建築パースが掲載された開業当時の「名古屋国際ホテル」のDM折りパンフレットの最初の見開き面（左）と最後の見開き面の部分（右）（筆者蔵）

観パースを披露することを優先したためではないかと思わせる。1964年4月1日の開業を伝える「名古屋国際ホテル」のDM折りのパンフレットでも、前例の「ホテルオークラ」や「名古屋都ホテル」の開業時のDM折りパンフレットと同様に、1点の外観パースと10点の内観パースが掲載され、建物を写した写真は一切使用されていない（図2-8）。

1960～70年代は、新規開業するホテルが増加しただけでなく、老舗のホテルや旅館が建て替え・新築を行うことも多かった。例えば、長崎県雲仙温泉の「九州ホテル」の創業は戦前で<sup>57)</sup>、当初は木造2階建てであったが、1964年のオリンピック開催に合わせて鉄筋コンクリート造の本館を新築した<sup>58)</sup>。古民家調を意識したデザインであると同時に、欧風の山小屋風にも見える外観だが、当時のDM折りパンフレットには、表紙に外観と内部の主要な空間（フロント、ロビー、大食堂、ホール、和室の客室、畳の大広間）の完成予想図の建築パースが掲載され（図2-9）、「豪華で大衆的なホテル」と紹介されていた<sup>59)</sup>。

大成建設は、オリンピック開催年8月の「ホテルニューオータニ」の完成を機に、同社が施工したニューオータニやオークラも含む全34件のホテルをまとめた冊子『HOTELS Constructed by TAISEI』を発行した（図2-10：左）。巻頭辞は当時の社長、本間嘉平のことばで「わが社は戦前戦後を通じ、わが国第一級のホテルを数多くてがけてまいりました。また近年は、海外においても次々とホテル建設の御下命を受け、『ホテルは大成』との有難い御好評を得るまでに至っております」と書かれている。この冊子には、当時大成建設が設計・施工を請け負い、計画が進行中のホテル6例の完成予想図の建築パースが掲載されている。6例中3例は海外のもので、残り3例が国内のホテルで、「会津グランドホテル<sup>60)</sup>」「塩原リバーサイドホテル<sup>61)</sup>」「九重レークサイドホテル<sup>62)</sup>」だった（図2-10：右）。





図 2-9：完成予想図の建築パースが載った 1964 年ごろの雲仙温泉の「九州ホテル」の DM 折りパンフレットの表紙と裏面（左）と見開き内部の部分（右）（筆者蔵）



図 2-10：大成建設施工のホテル紹介冊子『HOTELS Constructed by TAISEI』（1964 年）の表紙（左）と、「会津グランドホテル」「塩原リバーサイドホテル」「九重レークサイドホテル」の完成予想図の建築パースが掲載されたページ（右）（筆者蔵）

## (2) 風光明媚な観光地・温泉地でのホテル建設ブーム

オリンピック目的の訪日外国人がついでに日本各地を旅行することが期待され、1964 年前後には風光明媚な観光地・温泉地でもホテルの新築が相次いだ。例えば、映画『二十四の瞳』（1954 年）の舞台で知名度を増した小豆島には、1963 年に「小豆島国際ホテル」が開業している。「3 月 29 日開館」と明記された当時の観音折りパンフレットにも、手描きのイラストと建築パースが、見開きページ全面を使って掲載されている（図 2-11）<sup>63</sup>。そこにはホテル滞在を楽しむ人々も描き込まれているが、欧米人とおぼしき顧客の姿も多く、彼らの来訪が想定されていたことが分かる。

オリンピック開催年までで都内の大型高級ホテルの開業ラッシュは一段落したが、1964 年には 1970 年の大阪万博開催も決定していたので、そのことも考慮して、1965 年以降は、西日本を中心とした観光地でホテルが増えてゆく。

1965（昭和 40）年に開業したのは、城島高原（別府）の「ベップニューグランドホテル<sup>64</sup>（現・城島高原ホテル）」、「名鉄犬山ホテル<sup>65</sup>」、「名鉄中津川ホテル<sup>66</sup>」、「館山寺遠鉄ホテル<sup>67</sup>」、「ホテル雄琴<sup>68</sup>」などという具合に西日本に多く、東日本では「ホテル蔵王<sup>69</sup>」、「ホテル層雲<sup>70</sup>」などがあつた。例えば、浜名湖の堀江城跡地に建設された「館山寺遠鉄ホテル」の「5 月オープン」と明記された当時の DM 折りパンフレットでも、完成予想図の外観パースや各室内スパー





図2-11：開業当時の「小豆島国際ホテル」の観音折りパンフレット（裏面を開いた状態）に掲載される外観の建築パースと室内外のイラスト各種（筆者蔵）



図2-12：建築パースがふんだんに掲載された「館山寺遠鉄ホテル」のDM折りのパンフレットの表紙と裏面（左）と見開き内部の部分（右）（筆者蔵）

スのデッサン調パースがふんだんに掲載され、幾何学模様の奇抜な外観からも建築デザインへの格別なこだわりが感じられる（図2-12）。

1966（昭和41）年にできた主なホテルには、「天草国際ホテル<sup>[71]</sup>」、「鬼怒川グランドホテル」、「榛名レークホテル<sup>[72]</sup>」が挙げられ、1967（昭和42）年には、「皆生グランドホテル」、「阿蘇高原ホテル」、飯坂温泉の「ホテル聚楽（現・飯坂ホテルジュラク）」、「佐渡グランドホテル<sup>[73]</sup>」が開業した。いずれも景色の良い自然環境豊かな観光地や温泉地が多く、佐渡島の弥彦山国定公園にできた「佐渡グランドホテル」は、メタボリズム思想（建築も新陳代謝し、細胞分裂のように増殖できるとする考え方）を標榜する建築家、菊竹清訓が設計した。横に異様なほど長く伸びた斬新なデザインの巨大ホテルであるが、その規模に合わせてパンフレットも「大判」である。施工は福田組によるもので、開業当時のW（外四つ）折りパンフレットには「全長120mの威容を加茂湖に映す佐渡グランドホテルは力強い現



代建築のなかに可能な限りの夢と佐渡独自のローカル色をとり入れ外装をラワン材で仕上げた鉄筋3階建てのデラックスホテルです」と、建築説明に力を入れた宣伝文も書かれていて、表紙部分には、ファサードの完成予想図、見開き部分には、様々な角度からみた外観と主要な各室内の建築パースが掲載された（図2-13）。



図2-13：建築パースを多く使った「佐渡グランドホテル」の開業当時のW（外四つ）折りパンフレットの表紙（筆者蔵）

1968（昭和43）年に開業した主なホテルには、城崎温泉の「ホテルブルーきのさき（現・大江戸温泉物語 きのさき）」<sup>(74)</sup>、「霧島プリンスホテル（現・旅行人山荘）」、「名鉄トヤマホテル（現・ホテルグランテラス富山）」があり、やはり大阪万博を意識していたせいかいずれも西日本である。しかし、1966年4月に伊ローマで開催されたIOC総会で、1972年の冬季オリンピックの開催地に札幌が選ばれたことから、1960年代末ごろから北海道でのホテル新築も増えてくる。早い例では、札幌の奥座敷と呼ばれる定山溪温泉で、今も当地を代表する宿である「章月グランドホテル」が1968年に新規開業している。創業年は戦前で木造旅館であったが、新築を機にグランドホテルと改名した。「昭和43年12月 本館新装オープン」と明記された「章月グランドホテル」のパンフレットは、正方形に近い冊子状の絵本のような作りで、表紙に完成予想図の外観パース、各ページには各部屋の水彩イラスト風の内観パースが、それに対して不釣り合いなほどの大きな紙面に、たっぷりとしたゆとりをもって掲載された（図2-14）。新築した意気込みがこのような建築パースの過剰露出に反映されたのだろう。

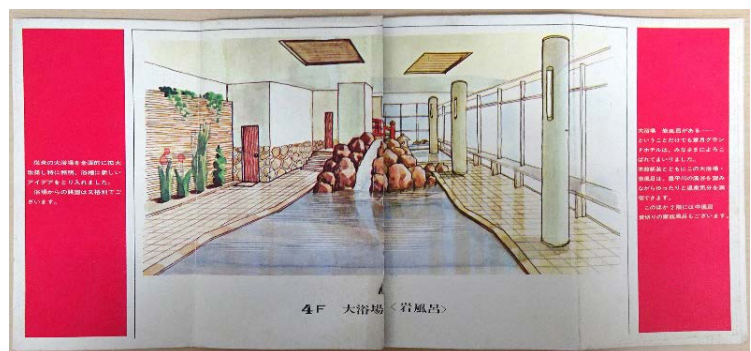


図2-14：定山溪の「章月グランドホテル」の1968年の新規開業時の冊子状のパンフレットの表紙（左）と見開きページの一例（右）（筆者蔵）

### (3) スカイルーム・回転展望レストラン付きのホテル

1960年代に浸透したホテル建築の特徴のひとつに、眺望する楽しみを生かした最上階の空間活用がある。淡路島の洲本温泉にあった「三熊館<sup>(75)</sup>」は、かつては棟が連なる優雅な和風建築で島を代表する高級旅館であったが、1960



年代に新築されたさい、最上階に「スカイラウンジ」が設けられた。設計は金沢の建築家、山岸敬信によるもので(日刊建設通信社出版部編, 1963, 492)、外観パースが表紙に載った当時のDM折りパンフレットには(図2-15:左)、「淡路島最高最大のホテル登場」、「鉄筋9階建て《淡路島最大》マンモスホテル」、「より一層拡充、大きくなりました」と、その規模の大きさを伝える宣伝文句が、表現を変えながら同パンフレット内で何度も繰り返し誇張された。なかでもこのホテルが自慢にしていたのは「スカイラウンジ」で、この部屋だけ内観パースが掲載されている(図2-15:右)。このような展望階は、当時多くの新築ホテルでみられたが、まだ物珍しかったようで、「最上8階のスカイラウンジでのお食事が、コーヒーが、ワインがこんなにおいしいものと驚きます—語りかけよう “空からこんにちは”」と、現代では違和感あるほどにとても純朴な説明文がこのパンフレットには刻まれている。

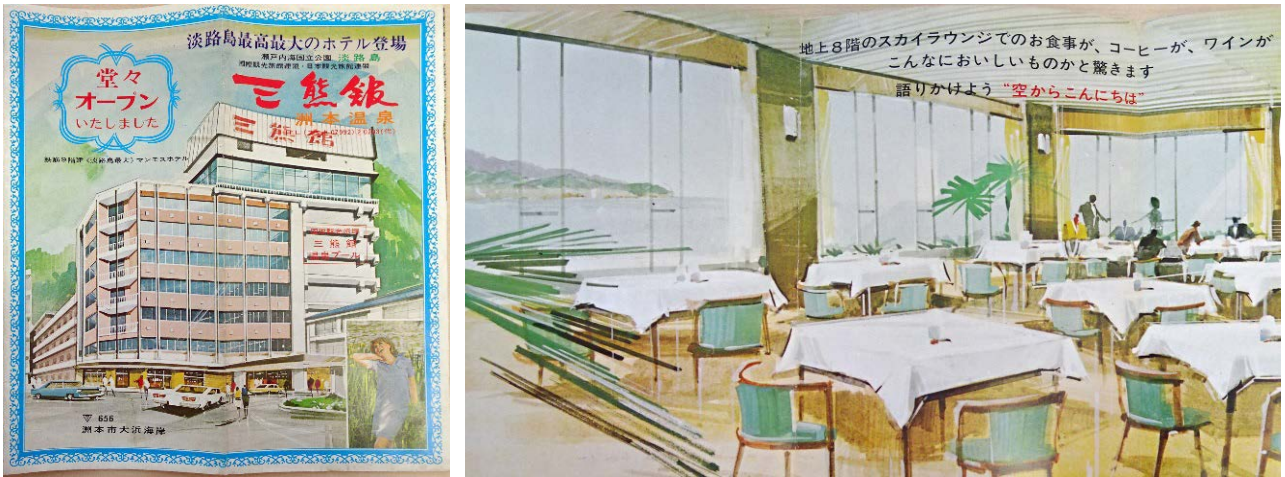


図2-15：淡路島のホテル「三熊館」の当時のDM折りパンフレットに載った外観(左)とスカイラウンジ(右)の建築パース(部分)(筆者蔵)

静岡県・伊東温泉の「伊東園ホテル」の1960年代の全館新築時の横長の冊子状のパンフレットでは、高層階にロビーを設置したことが強調されている。完成予想図が表紙に掲載され、「伊東温泉唯一の高層建築新館は近代建築美」、「高層建築」、「伊東名物の天空ロビー」、「伊東園が誇る天空ロビーから四方を俯瞰します(中略)誠に絶景で倦くことがありません」と書かれている。その「天空ロビー」があるのは、高層性を連想させる名で「白雲荘」と呼ばれた新館で、専用の二つ折りパンフレットも発行されていた。画像はすべて建築パースだけで構成されたパンフレットで(図2-16)、その文面には「地上八階の豪華な殿堂、<sup>さなが</sup>「宛ら天空に在るが感の、天空ロビー」と説明され、やはり最上階に公共空間を設けたことが、当時はかなり画期的なことであったことがうかがえる。



図2-16：「伊東園ホテル」の新館「白雲荘」新築時の二つ折りパンフレット表紙面(左)と見開き面(右)(筆者蔵)



新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて

伊東からほど近い熱海では、1969年に新館を建てた「大月ホテル」で「展望風呂」が売りとなっていた。設計は東京・赤坂に事務所をもつ、旅館建築に造詣の深い建築家、福永満八によるもので（日刊建設通信社出版部、1959、202）、当時の冊子状の横長のパンフレットの表紙には、外観の建築パースが掲載され、塔屋の最上階にガラス張り



図2-17：熱海の「大月ホテル」(左)と「南明ホテル」(右)の冊子状のパンフレット(いずれも筆者蔵)



図2-18：開業当時の「神戸ニューポートホテル」の巻き四つ折りパンフレット(筆者蔵)



図2-19：「広島国際ホテル」の観音開きパンフレットの表紙に載った完成予想図の建築パース(左)；完成予想図が載った和倉温泉のホテル「なおき」の新装オープン時のチラシ(部分)(右)(いずれも筆者蔵)



の空間に多くの人々がいる様子が描かれている (図 2-17: 右)。熱海の「南明ホテル (現・大江戸温泉物語 あたみ)」の同時期のパンフレットも同じようなレイアウトと判型の冊子状で、表紙の建築パースの描き方も似ているので、同じく福永満八が設計したのかもしれない (図 2-17: 右)。

東京では 1964 年、国内最高層建築となった「ホテルニューオータニ」(大成建設) の最上 17 階にある円盤状の「ブルースカイラウンジ」が回転したが、同じく 1964 年には、「神戸ニューポートホテル<sup>76)</sup>」(日建設計) が開業し、こちらの最上階が日本初の回転展望レストランとなった。建設当時の「神戸ニューポートホテル」の巻き四つ折りパンフレットの表紙には、完成予想図が掲載され、2 面見開き部分には、回転レストランの内観パース、4 面見開き部分には 10 点の内観パースが紹介されている (図 2-18)。円盤状の回転展望レストランを備えたホテルは、1960~70 年代に流行し (河村, 2022, 40-41)、他のホテルのパンフレットでもその特異な外観が強調されている建築パースをみることができる。例えば、1966 年創業の「広島国際ホテル (現・ひろしま国際ホテル)」(図 2-19: 左) のパンフレットの表紙や、和倉温泉のホテル「なおき<sup>77)</sup>」の 1973 年 9 月 1 日の新装オープンを伝えるチラシでも円盤状の回転展望レストランのある完成予想図が掲載された (図 2-19: 右)。

### 3. 1970 年の大阪万博前後に開業したホテルのパンフレット

#### (1) 1970 年の大阪万博と 1972 年の札幌オリンピックでできたホテル

1970 年の大阪万博開催を目前とする 1969 (昭和 44) 年に開業するホテルは、当然ながら、京都、大阪、神戸、名古屋といった関西の大都市に多く、東京のホテルでは増改築が多いが、新規に開業するものもあった。「赤坂東急ホテル (現・赤坂エクセルホテル東急)」、「京都グランドホテル (現・リーガロイヤルホテル京都)」、名古屋では「ホテルナゴヤキャッスル<sup>78)</sup>」と、ワシントンホテルチェーンの第一号店となった「第一ワシントンホテル<sup>79)</sup>」がこの年に開業し、回転展望レストランを備えた「宝塚グランドホテル<sup>80)</sup>」、「奈良パークホテル」、「ホテル奥道後<sup>81)</sup> (現・奥道後 壱湯の守)」、さらに九州では福岡に「博多東急ホテル (現・西鉄イン福岡)<sup>82)</sup>」と「西鉄グランドホテル」ができた。なお信州・長野では「ホテル井筒<sup>83)</sup>」(浅間温泉) や「奥志賀高原ホテル<sup>84)</sup>」が誕生している。

建築パースを掲載したホテルのパンフレットの興隆はさらに続く。例えば、11 月 1 日のオープンを伝える「京都グランドホテル」のパンフレットは、観音折りに冊子を組み合わせた豪華なもので、見開き大画面に、鳥瞰図で捉えた外観パースを載せている (図 3-1)。明らかに、ホテル自慢の八角形の回転展望レストランの存在を強調するための構図である。



図 3-1: 「京都グランドホテル」の開業時の冊子状の観音折りパンフレットの巻頭見開き折込みページ (左) と冒頭 2 ページの部分 (右) (筆者蔵)

1969 年の 10 月 5 日の開業時に発行された「ホテルナゴヤキャッスル」の DM 折りパンフレットも建築パースだけで構成されたものだ。ここでも表紙図像に選ばれたのは鳥瞰図の外観パースで、眼前の名古屋城と対等しつつ、ホテルがさらなる高みを目指しているかのような表現がなされている (図 3-2)。最初の見開き部分では、このホテル



の売りとなったシースルーエレベーターをクローズアップしたイラストがあり、説明文中では「ホテルではじめての展望式エレベーター」であることが明記され、「美と文化の祭典 万国博ももうすぐ 世界のお客さまを 充分におもてなしできる喜びでいっぱいです。」と、大阪万博に合わせてこのような最新鋭の設備を整えたことが、このパンフレットに書かれている。さらに見開き内部には、14点もの内外観を描いた建築パースが掲載されていて、溢れる建築愛が伝わる仕上がりのパンフレットだ。



図3-2：開業当時の「ホテルナゴヤキャッスル」のDM折りのパンフレットの表紙面（筆者蔵）

大阪万博の開催年である1970（昭和45）年に開業した西日本の主なホテルには、大阪の「千里阪急ホテル<sup>85)</sup>」、「京都東急イン<sup>86)</sup>」、「城崎グランドホテル（現・西村屋ホテル招月庭）」、琵琶湖の「名鉄マリーナホテル<sup>87)</sup>」があり、東日本では青森の「ホテルニュー薬研<sup>88)</sup>」や北海道の「洞爺パークホテル<sup>89)</sup>」が挙げられる。

1971（昭和46）年に開業するホテルは、翌1972（昭和47）年に札幌で冬季オリンピック大会が行われることを意識したものが多く、都内では日本最高層建築となった西新宿の「京王プラザホテル」や、「高輪東武ホテル（現・品川東武ホテル）」、品川の「ホテルパシフィック東京<sup>90)</sup>」ができ、北海道では「札幌国際ホテル<sup>91)</sup>」と「定山溪ニューグランドホテル<sup>92)</sup>」、東北では「磐梯グランドホテル<sup>93)</sup>」、西日本では、「鳥羽シーサイドホテル」、「高松グランドホテル<sup>94)</sup>」、「鷺羽グランドホテル」、「大分西鉄グランドホテル<sup>95)</sup>」、「霧島国際ホテル」が開業している。

もちろん札幌オリンピックの開催年となる1972（昭和47）年も、重要なホテルが日本各地で開業した。東京では「銀座第一ホテル<sup>96)</sup>」と九段下の「ホテルグランドパレス<sup>97)</sup>」、北海道では「札幌プリンスホテル<sup>98)</sup>」と「函館国際ホテル<sup>99)</sup>」、引き続き日本各地でも「徳島パークホテル<sup>100)</sup>」、「博多都ホテル<sup>101)</sup>」、「下田プリンスホテル<sup>102)</sup>」、浜名湖（館山寺）の「遠鉄ホテルエンパイア（現・ホテルウェルシーズン浜名湖）」、「金沢ニューグランドホテル」、「隠岐プラザホテル」などが誕生した。建築パース入りのパンフレット文化はまだなお健在で、例えば、「隠岐プラザホテル」のDM折りのパンフレットでは、表紙に外観パース、見開き内部には6点の内観パースが収録されている（図3-3：左）。その一方、大手ゼネコン各社が、ホテルの竣工記念に作成した冊子の様相は変わってきた。日本設計による「京王プラザホテル」、鹿島建設の「ホテルパシフィック東京」、竹中工務店の「ホテルグランドパレス」の竣工記念冊子は、いずれもかなりの大判サイズ（370×265mm）であるが（図3-3：右）、図版は写真をメインに使ったもので、かろうじて「ホテルグランドパレス」の冊子の表紙に建築パースが使用されている程度だ。つまりホテルの竣工記念冊子については、1964年のオリンピック前に出たものは建築パースを数多く盛り込む傾向があったのに対し、1970年代は冊子の判型が巨大化して、建築写真で構成されるほうが好まれるようになってきたのだ。

1973（昭和48）年には、外資系ホテルチェーン「ホリデイ・イン」の日本第一号店となる「ホリデイ・イン京都」が京都に誕生する<sup>103)</sup>。特筆すべきは、このホテルでは、ボウリング場のみならず、プール、アイススケートリンクも



図3-3：建築パースが多数掲載されている「隠岐プラザホテル」のDM折りパンフレットの表紙面（右）；「ホテルグランドパリス」の竣工記念冊子—完成予想図の建築パースは表紙のみに使われた（左）（いずれも筆者蔵）



図3-4：建築パースが掲載された開業当時の「湯沢ニューオータニホテル」のDM折りパンフレットの表紙（左）；増築時の建築パースのある「池の浦荘」の四つ折りパンフレットの表紙（右）（いずれも筆者蔵）

備えていたことで、1970年代ホテルの特徴であるスポーツ・娯楽施設の充実ぶりが象徴されている。この年に開業した主なホテルには、箱根の「湯本富士屋ホテル」、熱海の「ホテルニューアカオ<sup>(004)</sup>」、「ニュー山中湖ホテル<sup>(005)</sup>」、「指宿ロイヤルホテル」、「奄美グランドホテル<sup>(006)</sup>」、「岐阜グランドホテル」、「名鉄岡崎ホテル<sup>(007)</sup>」、「諏訪湖ロイヤルホテル」、「湯沢ニューオータニホテル」、陸中海岸の「浄土ヶ浜潮吹グランドホテル」、「札幌東急ホテル<sup>(008)</sup>」、そして23階に円盤状の回転レストランを備えた札幌の「センチュリーローヤルホテル（現・センチュリーロイヤルホテル）」がある。



東京の「ホテルニューオータニ」がチェーン展開を始めた「湯沢ニューオータニホテル」のDM折りのパンフレットには、表紙にも見開き内部にも内外観の建築パースが大々的に掲載されている（図3-4：左）。その一方で「諏訪湖ロイヤルホテル」の観音折りのパンフレットに載った建築パースは、全6点あるもののどれも小さく暗い発色で地味だ。ともあれ表紙には自然環境の写真が選ばれ、他の写真も自然を題材にしたものばかりで、建物の写真は一切ないが、ホテルの視覚的情報は依然として建築パースに頼っている。

1974（昭和49）年には、東京の「ホテルニューオータニ」が40階建ての新館タワーを建設した。同年に創業した「札幌全日空ホテル（現・ANAクラウンプラザホテル札幌）」は、全日空ホテルチェーンの第1号店で、建設時は25階建ての北日本最高の高層建築となった<sup>109</sup>。ほかにも茨城国体開催に合わせて、旧・水戸市役所の跡地に建設された「水戸京成ホテル<sup>110</sup>」や、「岐阜ワシントンホテル」、「小倉キャッスルホテル<sup>111</sup>」などがこの年に開業した。鳥羽湾（池の浦）の「池の浦荘（現・旅荘 海の蝶）<sup>112</sup>」は、1960年の創業の旅館であったが、1974年の増改築でホテル型の旅館となった。このとき発行された「池の浦荘」の四つ折りパンフレットには、表紙に鳥瞰図の外観パースが載り、見開き内部には数多くの内観写真とともに内観パースが3点だけ収録されている（図3-4：右）。1960年代に比べると1970年代のパンフレットでは建築パースへの偏愛はやや薄れてきたようであるが、適材適所にはまだまだ建築パースがパンフレットに有効活用されていたようだ。

## (2) 1970年代のホテルの娯楽設備の充填

1970年代の大型ホテルでは、スポーツ・娯楽面の充足が急速に図られていった。数多くのホテルで屋内外にプールが設置され、ボウリング場まで備えるようになった（図3-5）。1964年に全日本ボウリング協会が設立され、須田開代子や中山律子といった美貌も兼ね備えた女性プロボウラーの活躍に誘発されて、1970年代のホテルはボウリングブームとともに歩んでいったといっても過言ではない。



図3-5：1970年代の「鬼怒川温泉ホテル」（左）と「鬼怒川ロイヤルホテル」（右）のパンフレットに掲載された館内ボウリング場の建築パース（いずれも筆者蔵）

1970年ごろの「鬼怒川温泉ホテル」の16頁折りパンフレットは、ボウリング場の存在を大々的に伝えるレイアウトになっている。かつて「鬼怒川温泉ホテル」は、名門「日光金谷ホテル」の姉妹店として、1931（昭和6）年に創業したさいは和風建築の旅館のようなホテルだったが<sup>113</sup>、1959年にモダニズム建築で柳英男の設計で建て替えられた<sup>114</sup>。大阪万博の開催を機に新館が増築されたとき、ボウリング場などの娯楽設備が数多く充填されたため「JOY UP」というキャッチコピーが、新館完成記念用のパンフレットに謳われている（図3-6：左）。この16頁折りパンフレットでは、ボウリング場を含む内外観の建築パースで飾られて、「1200名収容の大型ホテルとして新誕生」、「楽しさがぐーんと大きく倍増＝〈JOY-UP〉しました」、「最新の設備、ユニークな内容でお子様、ヤング、お年寄り、すべてのお客様にご満足いただけます」、「多種多様な旅行目的に合った21世紀のリゾートホテルとして生まれ変わりました」と説明されている。さらに同パンフレットには建物の断面図も掲載されていて、6階建ての本館と11階建ての新館が3階層分で結ばれ、その1階部分に大浴場「ピンク風呂」（当時は男性専用）、2階にヤングコーナー（ダンスや談話ができる部屋）、ボウリング場、娯楽室（ジュークボックス、電子オルガン、各種最新ゲーム機を設置）、売店といった数々の娯楽施設ができたことがわかる。

同じく鬼怒川温泉では、1962年創業の「ホテル正華」という和風旅館式のホテルが、1972年に「鬼怒川ロイヤル



図3-6：新館オープン時の「鬼怒川温泉ホテル」の16頁折りパンフレットの表紙に掲載される外観パース（左）；「鬼怒川ロイヤルホテル」のDM折りパンフレットに掲載される外観パース（右）（いずれも筆者蔵）



図3-7：開業当時の「輮シーサイドホテル」のチラシに使用された完成予想図の建築パース（筆者蔵）

ホテル」(現在は伊東園ホテルズの傘下)と改名され、6階建て鉄筋コンクリート造で新築された<sup>115)</sup>。このときに発行された大きな正方形のDM折りパンフレットには、鬼怒川をドイツのライン川に見立てた宣伝文句で、「鬼怒川ラインの楽しいホテル—あなたの夢をみたく鬼怒川ロイヤルホテル」と娯楽ムードを盛り立てつつ、10点もの内観パースが掲載された。それらは、和洋折衷な客室2種、ロビー、レストラン、ナイトクラブ、畳の大広間、大浴場、ボウリング場、ゲームコーナー、エアライフル射的場の完成予想図である(図3-6:右)。つまりホテル内の娯楽設備の充填をパンフレットで伝える場合は、依然として建築パースが有効的に使われたのだ。

1970年代は、シアターレストランをつくるホテルも増えてきた。大阪万博の集客を期待して、1970年(昭和45年)4月、瀬戸内海国立公園・輮の浦(広島県福山市)にできた「輮シーサイドホテル<sup>116)</sup>」では、シアターレストラン「ときわ」が売りだった。開業を伝えるチラシ表面には、ホテルの完成予想図が全面裁ち落としで使われ(図3-7)、裏面には、シアターレストランとラジウム鉱泉の大浴場の建築パースも載っている。そこに添えられた文面は、「食事



をしながら観劇を楽しむ歌舞伎スタイルを現代風にアレンジしたもの、西日本では初めてのこころみです。照明、音響、舞台装置ともに一流劇場の設備をとり入れました。部隊のバックには五色の大噴水が豪華なムードをもりあげます」とあるので、西日本を代表するホテル内のシアターレストランのひとつであったようだ<sup>117)</sup>。

#### 4. おわりに

以上、昭和30～40年代(1974年まで)に開業したホテルを、時系列順にリストアップしながら、まだ限定的に可能な範囲内だけではあるが、当時のホテルのパンフレットの事例を集めてみたところ、建築パースを掲載するパンフレットがかなり多いということが判明した。昭和30年代と比べると、昭和40年代のパンフレットでの建築パースの使用頻度は徐々に落ち、写真との併用が増えてきたことも垣間見えてきたが、新しいホテル内の設備・施設を説明するときには、建築パースの使用は効果的でまだよく好まれていた。

1964年東京オリンピックから、1970年大阪万博や1972年の札幌冬季オリンピック大会など、これらの国家イベントが開催される前後、つまりホテル建築ラッシュが起こった時期のパンフレットに載った建築パースからは、設計者やホテル運営者たちの、新築ホテルへの熱い意気込みが伝わってきて、当時のホテル建築の文化的な価値を、築後50年以上が経過しつつある今、早急に見直さなければならないことに気が付かされる。にもかかわらず、ほとんどのホテルがすでに解体されてしまったか、存続していても大幅に改修・改築されてしまっていて、当時の建築デザインの美点を今も保全しながら営業しているホテルがあまりにも少ない。本稿ではホテル名の初出時に、注のかたちで、往時の姿を留めていないホテルについては、閉業や解体情報などを記しておいたが、注をつける必要のないホテルは圧倒的に少数派だった。

近年は、東京2020オリンピックと大阪のExpo 2025の影響でホテル開業ラッシュが続き、ホテルの新築完成予想図はインターネット上のプレスリリース記事では慣例となっていて、建築パースは一般消費者にとっても再び身近な存在となっている。様々なデジタル端末とスマートフォンの普及によって、近年は紙媒体のパンフレットを作成しないホテルが多くなってきたが、かつてパンフレットが刷られていた限り、パンフレットそのものもメディアのひとつであったので、それぞれの時代にとって、そこに記録された建築パースを含む図像や文字情報は、当時のホテルの建築文化を知るための貴重な歴史的資料に他ならないのである。

#### 【謝辞】

本研究は、2021年度跡見学園女子大学特別研究助成費を受けて実施された研究発表の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

#### 〈注〉

- (1) 京都ステーションホテルの建物はすでに1960年代に建て替えられたが、それも1984年に解体された。「京都ステーションホテル、ホテル戦争激化に対応し全面建て替えに。」『日経産業新聞』、1983年7月27日、p.15；清水組編『ホテル建築図集』清水組、1936年、pp.48-51。
- (2) 清水組(現・清水建設)の小笹徳蔵の設計による京都ホテルの建物は、1964年に改修、その後も増築が繰り返されファサードはすでに失われていたが、1994年の新築高層化のため、1991年に完全に解体された。「京都ホテル、60メートル計画実現へ『景観破壊』と仏教会【大阪】」『朝日新聞』朝刊、1991年2月15日、p.28；[https://www.shimz.co.jp/works/jp\\_com\\_192802\\_kyotohotel.html](https://www.shimz.co.jp/works/jp_com_192802_kyotohotel.html) (2021年12月28日閲覧)；清水組編、前掲書、pp.34-47。
- (3) 博多日活ホテルは1954年に創業され、1970年に増改修して「博多城山ホテル」となったが、2003年に閉業し解体された。「日活ついにホテルなし 最後の「小倉」も譲渡へ」『読売新聞』1972年2月2日、p.6；「博多・城山ホテル9月閉鎖 施設老朽化 建て替えも検討／鹿児島」『読売新聞』西部夕刊、2003年7月5日、p.11。
- (4) 1955年の創業時のホテルニューナゴヤは名古屋駅前にあったが、1969年に名古屋城前へ移転・新築建て替えて、「ホテルナゴヤキャッスル」と改名された。その後外資系ホテルの傘下となり、2022年3月現在、再び新築建て替え工事中である。「ナゴヤキャッスル 元の名に『ウェスティン』契約終了」『読売新聞』中部版朝刊、2017年5月19日、p.8。
- (5) 「赤城ロッジ開設」『観光情報』1956年12月号(82)、p.19；東武興業株式会社「光徳ロッジ・赤城ロッジ」『新建築』1958年2月号(33)、pp.34-44。
- (6) 1964年(昭和39年)にホテルとなった。朝日新聞社編『日本の宿—Where to lay your head in Japan』朝日新聞社、1977年、p.222。
- (7) 比叡山国際観光ホテルは1998年に解体、その跡地にはフランス風のホテル「ロテル・ド・比叡」が建った。

- (8) 坂倉準三の設計によるスイス・シャレー様式の建物であったが、1994年に解体され、1996年に現在の山小屋風の建物に新築された。坂倉準三建築研究所「白馬東急ホテル」『建築文化 15(3)(161)』1960年3月号、pp. 25-31；三橋謙一「新設の白馬東急ホテル拝見」『ホテルレビュー 11(120)』1960年4月号、pp. 8-11；「東急ホテルチェーン、白馬東急ホテル客室大型化へ改築。」『日経産業新聞』1994年8月31日、p. 21。
- (9) 1970年ごろ「銀座日航ホテル」と改名され、2014年に閉業・解体。2017年、その跡地に「ホテル ザ セレスティン銀座」が開業した。「広告：ホテル日航 本日開業／日本航空ホテル」『読売新聞』、1959年12月1日、p. 7。
- (10) 芦原義信建築設計研究所「ホテル：日航」『近代建築』1960年3月号、pp. 25-41；芦原義信建築設計研究所「ホテル日航」『建築文化』1960年3月号、pp. 5-18；芦原義信建築設計研究所「銀座ホテル日航」『新建築 39(11)』1964年11月号、pp. 183、196、198。
- (11) 2001年に閉業・解体された。「銀座東急ホテル閉鎖、跡地に時事通信本社」『朝日新聞』朝刊、2000年2月26日、p. 13。
- (12) 佐藤武夫設計、施工は大成建設。1982年2月8日の火災で死者33名を出し、同年10月に廃業した。建物の解体は1996年。「全館使用禁止に ニュージャパン／ホテル・ニュージャパン火災」『読売新聞』夕刊、1982年10月1日、p. 15；「千代田生命、ホテルニュージャパン解体、日本国土開発と契約一更地で売却へ。」『日経産業新聞』1995年11月1日、p. 2。
- (13) 設計は西武鉄道、施工は大成建設で、2006年に閉業、2010年に解体され跡地にはマンションが建った。「4ホテルの売却先発表 伊豆箱根鉄道」『朝日新聞』静岡版朝刊、2006年8月11日、p. 23；「東急不、熱海にマンション開発、全室、オーシャンビュー。」『日経産業新聞』2010年7月13日、p. 16。
- (14) 1992年に「パレスホテル箱根」と改名・営業していたが、2018年に閉業・解体された。「箱根観光ホテル合併 パレスホテル」『朝日新聞』東京版朝刊、1991年5月2日、p. 11；「パレスホテル箱根 老朽化で来年閉館＝神奈川」『読売新聞』東京版朝刊、2017年3月7日、p. 26。
- (15) 1986年に解体・閉業し、1988年「ホテルニュー長崎」として新築・開業した。「ニュー長崎ホテル、きょう改築に着手—ニューオータニが運営指導。」『日本経済新聞』九州版、1986年3月19日、p. 13。
- (16) 1983年に閉業した。開業当時のパンフレットには完成予想図の建築パースが使用されていた。ヒストリーオブ電力ビル：番外編「グランドホテル仙台」物語：[https://www.d-biru.com/kanko\\_dbiru\\_bangai.html](https://www.d-biru.com/kanko_dbiru_bangai.html) (2021年12月26日閲覧)；「グランドホテル仙台、『ホテル新設組』に押し入れ閉鎖。」『日経産業新聞』1983年4月1日、p. 14。
- (17) 1977年に閉業した。開業当時のパンフレットには、完成予想図の建築パースが掲載されており、その画像は、ncraft氏のブログ「クラフト建築設計室 きまぐれ日記2」の2021年6月7日の投稿「【四日市の繪葉書】第55回」：<https://ameblo.jp/ncraft/entry-12602419646.html> (2021年12月26日閲覧) でみることができる。「近鉄、宿泊客の増加に対応、四日市都ホテルの建設に着手。」『日経産業新聞』1975年10月29日、p. 8。
- (18) 入江雄太郎「熊本ホテルキャッスル」『近代建築 14(12)』1960年12月号、pp. 59-66。熊本ホテルキャッスルは、1960年の熊本国体で天皇陛下を迎えるために誕生したホテルであるが、1973年に解体され、1975年に現在の建物に新築された。熊本ホテルキャッスル「HOTE HISTORY (熊本ホテルキャッスルの歴史)」<https://www.hotel-castle.co.jp/history/> (2022年2月9日閲覧)。
- (19) 一般客向けのサイズのパンフレットでは、外観の完成予想図の建築パースが表紙に使用され、その画像は[http://www.hotel-label.com/ginza\\_tokyu.html](http://www.hotel-label.com/ginza_tokyu.html) (2021年12月26日閲覧) でみることができる。
- (20) 2009年から建て替えのため休業・解体、2011年に新築・現在の建物で営業。「パレスホテル建て替え、11年末開業、ホテル・オフィス2棟に。」『日本経済新聞』朝刊2008年5月2日、p. 10。
- (21) 吉村順三の設計であったが、2014年に閉業・解体され、その跡地に2020年、「HOTEL THE MITSUI KYOTO」が建った。吉村順三「京都国際ホテル」『新建築 39(11)』1964年11月号、p. 191；「京都国際ホテル、営業終了へ」『日経MJ (流通新聞)』2013年10月21日、p. 11；「京都の高級ホテル、コロナ禍でも続々 三井初の最高級11月開業」『日経速報ニュースアーカイブ』2020年10月29日配信。
- (22) 2003年に閉業・解体された。
- (23) 9月20日に日赤病院跡地に開業した。釧路市統合年表 <https://www.city.kushiro.lg.jp/common/000017296.pdf> (2021年12月24日閲覧)
- (24) 2000年に解体され、2002年に「京成ホテルミラマーレ」と改称・新規開業した。
- (25) 富田昭次『ホテルの社会史』青弓社、2006年、p. 51；日活株式会社『日活五十年史』日活株式会社、1962年、pp. 24-25。
- (26) 1981年に閉業し、解体された跡地には、1983年に「ホテルグリーンヒル白浜」が建った。「南海電鉄など3社共同出資による『ホテルグリーンヒル白浜』が5日オープン。」『日本経済新聞』近畿B地方経済面、1983年2月18日、p. 10。
- (27) 2001年に閉業、2017年に解体された。「小倉ホテル解体、広場に、市が19年春整備、住友不動産と合意。」『日本経済新聞』九州地方経済面、2017年8月9日、p. 13。
- (28) 竹中工務店の設計・施工による。1972年に「小倉ホテル」と改名したが、2001年に閉業、2011年に解体された。竹中工務店七十年史編纂委員会『竹中工務店七十年史』株式会社竹中工務店、1969年、pp. 364-365；「旧小倉ホテル 再開発 店舗、マンションのビルに12年度末完成＝北九州」『読売新聞』北九州西部版朝刊、2011年2月1日、p. 27。
- (29) 1985年に新館開業。掘田英二建築設計事務所「大洗パークホテル」『建築文化』1961年10月号、pp. 95-100；「大洗パークホテル、新館に国際会議場—科学博での利用見込む。」『日経産業新聞』1985年1月10日、p. 13。
- (30) 2011年8月は営業していたが、2012年までに廃業している。
- (31) 2017年に閉業し、のち解体された。「金沢都ホテル54年で幕＝石川」『読売新聞』東京朝刊、2017年4月1日、p. 23。
- (32) 1955年に「新広島ホテル」という屋号で平和記念公園内に開業したホテルだったが、1962年に「広島グランドホテル」と改称・移転し、1973年には新館を増築した。1994年に閉業・解体され、新築されて「リーガロイヤルホテル広島」となった。「営業終える 広島グランドホテル」『朝日新聞』広島版朝刊、1994年11月1日；<https://rihgaroyalrecruit.com/hiroshima/new-graduate/about/history/>



- index.html (2021年12月30日閲覧)。
- 63) 設計は東急電鉄、施工は大成建設、1970年に増築。2002年に「横浜エクセルホテル東急」と改名、2011年に閉業・解体された。朝日新聞社編、前掲書、p.167:「横浜エクセル、来春営業終了、3月末、跡地に高層ビル。」『日経MJ(流通新聞)』2010年8月30日、p.15。
- 64) 1985年に閉業した。「別府の旅館・ホテル業界、宿泊客減で苦境に。」『日本経済新聞』九州A地方経済面、1985年10月18日、p.13; 志賀設計「作品 日名子ホテル」『近代建築 18(4)』、1964年4月号、pp.61-66。
- 65) 2014年に閉業した。瀬戸内海経済レポート「ホテルニューオカヤマ 3月24日で41年の歴史に幕 所有者から契約打ち切りで」『VISION OKAYAMA』2004年3月11日配信: <https://www.visionokayama.jp/article/20040310/29556> (2021年12月28日閲覧)。
- 66) 1984年、「キャピトル東急ホテル」と改名され、当時の建物は2006年に解体された。「ホテル『キャピトル東急』を建て替え 複合ビルで開業へ/東京・永田町」『読売新聞』東京朝刊、2005年8月27日、p.8。
- 67) 2024年末ごろの閉業、のち解体を予定している。「阪急阪神ホテルズ、6施設営業終了へ、街の再開発に合わせて活用。」『日経MJ(流通新聞)』2021年8月15日、p.7。
- 68) 2000年に閉業、のち解体された。村野森建築事務所「名古屋都ホテル」『近代建築 17(11)』1963年11月号、pp.21-36; 村野・森建築事務所「名古屋都ホテル」『新建築 38(11)』1963年11月号、pp.101-110; 村野・森建築事務所「名古屋都ホテル」『新建築 39(11)』1964年11月号、p.190; 「名古屋都ホテルの閉鎖発表 駅前でも集客厳しく 開業50年ギリギリの決断」『読売新聞』中部版朝刊、1999年7月24日、p.34。
- 69) 1978年に新館が建設された。「阪急電鉄の天橋立ホテル新館がオープン—丹後開発が運営を担当。」『日経産業新聞』1978年7月6日、p.10。
- 40) 佐藤武夫の設計による。1986年に当時の建物は解体され、1988年に新築された。2008年より「ANAクラウンプラザホテル新潟」となった。佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟」『近代建築 17(11)』1963年11月号、pp.39-56; 佐藤武夫建築設計「ホテル新潟・料亭万代」『新建築 38(11)』1963年11月号、pp.111-124; 「ホテル新潟、新装し完工式。」『日本経済新聞』新潟地方経済面、1988年4月15日、p.22; 「ホテル新潟、新装し完工式。」『日本経済新聞』新潟地方経済面、1988年4月15日、p.22。
- 41) 吉江憲吉設計の設計による。1999年に増築改修され、当時のデザインがよく残っているのは外観のみ。吉江憲吉設計事務所「ホテル・マウント富士」『近代建築 17(9)』1963年9月号、pp.81-94; 「ホテルマウント富士、17日改装オープン—客室倍増、会員制も。」『日本経済新聞』山梨版、1999年7月9日、p.25。
- 42) 森京介の設計による。2007年に閉業、解体された。森京介建築設計事務所「土浦京成ホテル」『近代建築 17(12)』1963年12月号、pp.85-92; 「土浦京成ホテル閉鎖、来年3月末、披露宴など低迷。」『日本経済新聞』茨城地方版、2006年10月25日、p.41。
- 43) 設計・施工は大成建設。1997年に閉業した。「東海観光、香港企業が買収—第三者割当9月に実施 51.6%株式を取得。」『日経産業新聞』1997年6月13日、p.15。
- 44) 2004年に閉業・解体され、同年、東急ホテルチェーンによる「羽田エクセルホテル」(東京国際空港第二旅客ターミナルビル内)が開業した。「東急ホテルチェーン、羽田エクセルホテル12月開業(情報プラス)」『日経産業新聞』2004年6月4日、p.23。
- 45) 1983年に川崎駅前に移転し、当時の建物は解体された。「日航ホテル、都市再開発で川崎ホテルを駅寄りに移転し客室3倍の200室に建てかえ。」『日経産業新聞』1981年5月19日、p.15; 「川崎日航ホテル」、20日オープン。」『日本経済新聞』首都圏版、1983年11月17日、p.5。
- 46) 2020年に閉業した。「名古屋の老舗2ホテル、半世紀の歴史に幕」『日経速報ニュースアーカイブ』2020年9月30日配信
- 47) 1982年にホテルは閉業・解体し、跡地には、商業棟「マリーナ・プラザ」が建った。「葉山マリーナ、装い新たに営業再開—再開の第1期工事完了。」『日経産業新聞』1983年9月20日、p.11。
- 48) 創業は1959年、2012年に倒産し、現在は伊東園ホテルズの傘下の「伊東園ホテル熱川」となっている。「熱川第一ホテルが破産手続き開始へ=静岡」『読売新聞』東京朝刊、2012年9月21日、p.28。
- 49) 2012年に新築され「日本平ホテル」と改名された。「駿河湾や静岡の街並みを一望、日本平ホテルが開業。」『日経MJ(流通新聞)』2012年9月24日、p.11。
- 50) 1982年に閉業した。「高倉商店、ホテル経営、『サンルートニュー姫路』—買収し、新装オープン。」『日経流通新聞』1987年3月9日、p.8。
- 51) 2023年までに建て替え「ヒルトン札幌パークホテル」になる予定となっている。「札幌パーク『ヒルトン』に建て替え23年開業=北海道」『読売新聞』朝刊、2019年3月29日、p.27。
- 52) 設計は観光企画設計社(KKS)。1990年に「札幌ロイヤルホテル」と改称され、2008年に閉業した。「札幌ロイヤルホテル月末閉鎖。」『日経MJ(流通新聞)』2008年6月11日、p.9。観光企画設計社が設計に関わった1960～70年代に新築した主なホテルには、ほかに東京の「ホテルニューオータニ」(1965); 「唐津シーサイドホテル」、「伊良湖ビューホテル」、「草津ホテルヴィレッジ」(1968); 「宇奈月ニューオータニホテル」、「秋田第一ホテル(のち秋田キャッスルホテル)」、水上温泉の「ホテル水上館」(1970); 「信州松代ロイヤルホテル」(1972); 「ホテルオークラ東京別館」、「ホテル日航那覇グランドキャッスル」(1973); 「草津ナウリゾートホテル」、「成田ビューホテル」(1974)がある。『建築画報:VA(Visual Architecture)』2008年3月号(vol.44:328) KKS特集号、pp.8-9; <https://www.kkstokyo.co.jp/works/archive/?id=1960#a1960> (2021年12月27日閲覧)。
- 53) 1983年に閉業し、「洞爺パークホテルサンパレス(現・洞爺サンパレス リゾート&スパ)」の別館となった。<http://www.hotel-label.com/tag-hokkaido.html> (2021年12月27日閲覧)。
- 54) 1928年の創業時は和風旅館だったが、1964年に本館を新築し、当時のパンフレットには完成予想図の建築パースが掲載された。

- <https://livedoor.blogimg.jp/cangee/imgs/8/5/85652cc6.jpg> (2021年12月27日閲覧)。
- 55) 2006年ごろに「平戸海上ホテル」と改称した。「十八銀行がホテル再生事業。」『日経MJ (流通新聞)』2006年4月7日、p. 9.
- 56) 2011年に売却され、「犬伏埼ホテル」と改称した。「京成電鉄、犬伏埼ホテル売却、来春、千葉の三セクに。」『日経MJ (流通新聞)』2011年12月14日、p. 7. 開業当時のパンフレットには内観の建築パースが掲載されていた。<https://page.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/t777067146> (2021年12月27日閲覧)。
- 57) 現在のホテルのオフィシャルサイトによれば、雲仙の九州ホテルの創業年は1917年とされるが、文献によっては1903(明治36)年とするもの(朝日新聞社編, 1977, 250)と、1914年以前とするもの(木村, 2006, 124)がある。
- 58) 1963年にホテル新築工事の掘削のさいに、温泉が吹き上げ、熱泉が噴出したため死傷事故が起こった。「30人がヤケド 雲仙で突然、温泉吹く」『読売新聞』夕刊、1963年9月5日、p. 7; 「1人は死ぬ 雲仙の熱泉噴出事故/長崎県南高来郡小浜町雲仙」『読売新聞』朝刊、1963年9月6日、p. 15.
- 59) 2016年の熊本地震を機に耐震構造が問題視され、2018年に九州ホテルの建物は解体され、「Mt. Resort 雲仙九州ホテル」と改名・新築した。そのさいに1917年の築年時の格天井のある大食堂を模したレストランが設置されている。
- 60) 1964年10月開業予定。閉業年ならびに建物の残存は不明。
- 61) 1964年10月開業予定。閉業年ならびに建物の残存は不明。
- 62) 1965年4月開業予定。2007年に閉業した。「九重レークサイドホテル、9月末に閉鎖」『朝日新聞』朝刊、2007年3月3日、p. 13.
- 63) 小豆島国際ホテルのパンフレットの宣伝文句には、「オリーブの小豆島に、あなたの夢を呼ぶ明るいまもあふれるシーサイドホテルが誕生しました。全館冷暖房、バス・トイレ付の和洋室50余(300名様ご宿泊可能)、大中小の宴会場、各種レジャー施設(中略)最も近代的なホテル…小豆島国際ホテルが、あなたのおいでを心からお待ちしています。」と書かれ、当時の客室はまだ和室のほうが優勢で、大宴会場では島の民謡ショーが行われた。
- 64) 設計は草野建築事務所、施工は大成建設、昭和40年12月12日オープンと書かれた完成予想図の外観パースを表紙に使ったパンフレットがあった。<https://aucfree.com/items/g427385630> (2021年12月27日閲覧)。また同じ外観パースを用いた絵葉書には屋号が「キジマニューグランドホテル」と表記されている <https://aucfree.com/items/v639344618> (2021年12月27日閲覧)。
- 65) 2019年に閉業した。解体・新築し、2022年3月に英インターコンチネンタル・ホテルズ・グループ(IHG)傘下で「ホテルインディゴ犬山有楽苑」が開業した。「名鉄、犬山ホテル建て替えへ。」『日経産業新聞』2018年6月6日、p. 13.
- 66) 閉業年ならびに建物の残存は不明。
- 67) 1968年に別館が増築され、1978年に大幅改築されたが、その後の閉業年ならびに建物の残存は不明。「遠鉄観光開発、館山寺遠鉄ホテルを全面改装—53年4月に新装オープンの予定。」『日経産業新聞』1977年11月2日、p. 7; 朝日新聞社編、前掲書、p. 189.
- 68) 設計は靖建設計事務所。閉業年・現存状況は不明。靖建設計事務所「今月の建築 ホテル雄琴」『近代建築 19(9)』1965年9月号、pp. 136-137.
- 69) 2015年に倒産した。「ホテル蔵王営業会社 破産手続き開始決定=山形」『読売新聞』東京朝刊、2015年5月30日、p. 33.
- 70) 2011年に廃業し、現在放置され廃墟となっている。竹中工務店七十年史編纂委員会『竹中工務店七十年史』株式会社竹中工務店、1969年、p. 424; 「ホテル層雲、事業停止、震災で利用減、従業員解雇も。」『日本経済新聞』北海道版、2011年9月3日、p. 1.
- 71) 2001年に「天草国際ホテルアレグリア」に改称し、現在は「天草アレグリアガーデンズ」となった。
- 72) 1980年代に廃業した。
- 73) 2019年に閉業した。「佐渡グランドホテル 再開めどたまたま 故菊竹清訓氏設計 築50年、昨冬から休業」『新潟日報』2020年7月8日配信、<https://www.niigata-nippo.co.jp/news/local/20200708554311.html> (2021年7月閲覧、現在同記事は削除されている); 菊竹清訓建築設計事務所「佐渡グランドホテル」『新建築』1967年11月号、pp. 165-174; 朝日新聞社編、前掲書、p. 155.
- 74) 設計は三田建築設計事務所。「ホテルブルーきのさき(設計・三田建築設計事務所)」『近代建築 23(2)』1969年2月号、pp. 133-138; 2011年に倒産し、現在は大江戸温泉物語グループの傘下となっている。「ブルーきのさき 破産へ」『読売新聞』大阪夕刊、2011年1月19日、p. 10.
- 75) のちに「淡路島国際ホテル・アレックス」と変名され、さらに2009年より「夢海遊 淡路島」と改名され現在に至っている。「洲本温泉、新装・改装ラッシュ スロー売りに集客アップ=兵庫」『読売新聞』大阪朝刊、2009年1月20日、p. 30.
- 76) 1992-95年に間に解体。「ダイエーの財務戦略、5年で負債3000億円削減—中内功社長が表明。」『日経流通新聞』1992年8月4日、p. 7; 「住専マネー闇へ(破綻の構図 住専・不良債権を追う:5)【名古屋】」『朝日新聞』朝刊、1996年7月6日、p. 26.
- 77) 2014年に休業の張り紙が掲示されたまま、再開の見込みなく廃墟が進んでいる。
- 78) 2020年に解体。建て替え新築後は、「エスパシオ ナゴヤキャッスル」と改称される予定となっている。「名古屋城望むホテル建て替え ナゴヤキャッスル、10月から休館」『朝日新聞』朝刊、2020年6月11日、p. 6; 「高級ホテル建設に20億円補助 愛知県と名古屋、発表」『朝日新聞』朝刊、2021年9月14日、p. 6.
- 79) 1993年に閉業し、同社の格安ビジネスホテルの別名ブランドで再建された。「課長の出張費でも大丈夫、藤田観光、ホテル1泊6000円程度。」『日経産業新聞』1993年8月4日、p. 18.
- 80) 設計は、ブルドーザー工事株式会社。2003年に廃業し解体され、跡地にはマンションが建った。ブルドーザー工事「宝塚グランドホテル」『近代建築 24(2)』1970年2月、pp. 105-108; 「日本エスリード、兵庫県宝塚市に分譲マンション。」『日経産業新聞』2004年4月2日、p. 13.
- 81) 設計は、根津建築事務所による。根津建築事務所「作品 ホテル奥道後」『新建築 44(7)』1969年7月号、pp. 207-221.
- 82) 設計は、浦辺建築事務所による。2002年に「博多東急イン」にリブランドされたが、2007年に閉業し、改築後は「西鉄イン福岡」



新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて

となった。「西鉄グランドホテル（設計・浦辺建築事務所）」『近代建築 23(8)』1969年8月号、pp. 87-94；「西鉄グランドホテル（設計・浦辺建築事務所）」『新建築 44(8)』1969年8月号、pp. 159-174；「博多東急イン38年の歴史に幕、最後のお客様見送る—『宿泊450万人に誇り。』」『日本経済新聞』西部夕刊、2007年5月16日、p. 20.

- 83) 2010年に閉業した。
- 84) 設計は平島二郎による。平島二郎「奥志賀高原ホテル」『建築文化 26(294)』1971年4月号、pp. 145-150.
- 85) 設計は浦辺建築事務所。2025年末に閉業予定。「千里阪急ホテル（設計・浦辺建築事務所）」『新建築 45(6)』1970年6月号、pp. 178-182；「阪急阪神ホテルズ、6施設営業終了へ、街の再開発に合わせて活用。」『日経MJ（流通新聞）』2021年8月15日、p. 7.
- 86) 2002年に閉業した。「東急グループ、『東急ホテルズ』にチェーン名を統一。」『日経産業新聞』2001年12月25日、p. 19.
- 87) 1998年に閉業した。「磐梯グランドホテル閉鎖、名鉄、来年1月末で一収支改善見込めず。」『日本経済新聞』東北B地方経済面、1999年9月10日、p. 24.
- 88) 2016年に閉業した。「ホテルニュー薬研に幕 半世紀の歴史 宿泊客から惜しむ声＝青森」『読売新聞』2016年11月8日、p. 30.
- 89) 2012年より「ザレイクビュー TOYA 乃の風リゾート」と改称。「買収の旧天翔、開業は10月に 野口観光／北海道」『読売新聞』朝刊、2012年7月11日、p. 30.
- 90) 坂倉準三の設計による。2010年に閉業し、2011年に複合商業施設「SHINAGAWA GOOS（シナガワグース）」となったが、2021年に閉業・解体された。「ホテルパシフィック東京（設計・坂倉建築研究所）」『新建築 46(9)』1971年9月号、pp. 151-170；「ホテルパシフィック東京（設計・坂倉建築研究所）」『建築文化（299）』1971年9月号、pp. 98-106；西沢文隆「ホテルパシフィック東京のデザイン構成」『新建築 46(9)』1971年9月号、pp. 168-169；「京急、『シナガワグース』29日開業、テナント21社出店。」『日経産業新聞』2011年4月22日、p. 12；「お別れ前に『アリガトウ♡』シナガワグース 来月から解体、窓で文字＝東京」『読売新聞』東京版朝刊、2021年10月25日、p. 25.
- 91) 1989年に閉業した。「札幌でホテルが個性磨く一今、開業ラッシュ（消費最前線）」『日経流通新聞』1989年2月11日、p. 1.
- 92) 閉業年ならびに建物の残存は不明。
- 93) 2000年に閉業、のち解体された。「名鉄、9月中旬見通し、最終赤字31億円。」『日本経済新聞』中部地方経済面、2001年10月16日、p. 7.
- 94) 2001年に倒産・閉業した。「自己破産を申請 琴電グループの『高松グランドホテル』」『朝日新聞』香川版朝刊、2001年8月29日、p. 31.
- 95) 1999年に閉業し、2000年から「コンフォートホテル大分」として営業していたが、2010年に閉業、2017年に解体された。「旧西鉄ホテル跡地に大分中村病院移転へ 23年度中の開業めざす」『朝日新聞』大分全県版朝刊、2020年3月12日、p. 25.
- 96) 入居先の14階建ての「銀座三井ビル」が解体されるため、2002年に閉業した。その跡地には、2005年に「銀座三井ビルディング」が建設された。「三井不動産、銀座三井ビル解体、築30年で老朽化。」『日経産業新聞』2002年5月20日、p. 21.
- 97) 竹中工務店の設計・施工による。2021年に閉業、のち解体された。竹中工務店「ホテルグランドパレス」『近代建築 26(4)』1972年4月号、pp. 87-92；「グランドパレス、6月末に営業終了。」『日経産業新聞』2021年3月4日、p. 13.
- 98) 現在のタワー状の札幌プリンスホテルの建物は、2003年に建設され、それに伴い1972年築の旧・札幌プリンスホテルの建物（9階建て）内での営業は終え、のち2010年に解体された。「札幌プリンスホテルタワー、4月24日開業。」『日経MJ（流通新聞）』2003年10月23日、p. 2；「札幌プリンス、『旧本館』を売却、札幌青葉学園に。」『日経産業新聞』2010年6月23日、p. 15.
- 99) 設計は東海興業K.K.設計部による。東海興業K.K.設計部「函館国際ホテル」『建築界 21(6)』1972年6月号、pp. 37-45.
- 100) 設計は黒川紀章による。黒川紀章建築都市設計事務所「下田プリンスホテル」『新建築 48(9)』1973年9月号、pp. 243-250.
- 101) 2016年に閉業し、「博多都ホテル」の建物（設計・施工は日建設計）はのち解体され、2019年に新築、「都ホテル博多」と改名・新規開業した。「博多都ホテル（設計・日建設計）」『新建築 47(11)』1972年11月号、pp. 193-204；「近鉄、金沢都ホテル建て替え、地方都市で改装加速。」『日本経済新聞』近畿B地方経済面、2016年11月3日、p. 10；「近鉄不動産と近鉄・都ホテルズ、福岡市博多区の『（仮称）近鉄博多ビル』新築工事に着工」『日経速報ニュースアーカイブ』2017年10月5日配信。
- 102) 現在のタワー状の札幌プリンスホテルの建物は、2003年に建設され、それに伴い1972年築の旧・札幌プリンスホテルの建物（9階建て）内での営業は終え、のち2010年に解体された。「札幌プリンスホテルタワー、4月24日開業。」『日経MJ（流通新聞）』2003年10月23日、p. 2；「札幌プリンス、『旧本館』を売却、札幌青葉学園に。」『日経産業新聞』2010年6月23日、p. 15.
- 103) 1998年に一部建て替えた。2011年に「ホテルアバンシエル京都」と改称され新規オープンしたが、2013年に閉業した。「京都ブラザ、複合型ホテルを建設、『ホリデイ』一部建て替え一核店舗にイズミヤ。」『日本経済新聞』京都・滋賀地方経済面、1998年5月19日、p. 45；「ソラーレホテルズ、ホリデイ・イン京都を『ホテルアバンシエル京都』にリニューアル」『日経速報ニュースアーカイブ』2010年11月10日配信。
- 104) 2021年9月に本館（旧館）を閉業し、新館のロイヤル・ウィングのみでホテル営業を集約した。「ホテルニューアカオ、営業終了 コロナ禍、需要回復見込めず 熱海」『朝日新聞』静岡県版朝刊、2021年11月19日、p. 23.
- 105) 閉業年ならびに建物の残存は不明。
- 106) 2000年ごろ閉業し、2011年に解体された。たけちゃん「旧奄美グランドホテル解体中」『奄美大島ブログ』2011年8月21日配信：<https://amami-blog.jp/blog-entry-2209.html>（2021年12月28日閲覧）。
- 107) 2004年に閉業し、跡地にはマンションが建設された。「名古屋鉄道、子会社ビルを来春閉鎖。」『日本経済新聞』中部地方経済面、2003年9月6日、p. 7.
- 108) 2002年に閉業した。「札幌東急ホテル、30年の歴史に幕。」『日本経済新聞』北海道版朝刊、2002年12月16日、p. 38.

- (109) 設計・施工は日本設計。「札幌全日空ホテル (設計・日本設計事務所)」「建築文化 (通号 334)」1974年8月号、pp. 136-144.
- (110) 朝日新聞社編、前掲書、p. 148.
- (111) 1980年に倒産・閉業し、跡地には「サンルート小倉」が開業した。「突然閉鎖の小倉キャッスルホテル、資産ゼロで身動きとれず— 求むスポンサー。」『日経産業新聞』1980年10月31日、p. 9; 「ホテル新增設ラッシュ、陰で買収劇—全国チェーン、経営不振の中小を系列化。」『日本経済新聞』朝刊、1983年8月18日、p. 11.
- (112) 2003年に閉業し、2004年から「旅荘 海の蝶」と改名された。「近鉄系ホテル『池の浦荘』が惜しまれ閉鎖 二見町」『朝日新聞』三重版朝刊、2003年4月1日、p. 30; 「ホテル池の浦荘、『旅草海の蝶』で再開へ 和歌山の旅館が買収=三重」『読売新聞』中部版朝刊、2004年4月3日、p. 27.
- (113) 清水組編、前掲書、pp. 78-83.
- (114) 柳建築設計事務所「鬼怒川温泉ホテル」『建築文化』1959年10月号、pp. 33-37; 日刊建設通信社出版部編『実用建設名鑑』日刊建設通信社、1963年、p. 492.
- (115) 斎藤武「鬼怒川ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館 9(4)(100)』1972年4月記念特大号、pp. 38-40.
- (116) 近年「絆が深まる宿・和～なごみ～」と変名されたが、2018年11月にホテルとしての営業を終えている。現在は「軻シーサイドホテル和」と再び改名されたもの、一般のホテルとは異なる長期滞在型の宿泊施設となっている。福山観光コンベンション協会「宿泊：絆が深まる宿・和～なごみ～ (軻シーサイドホテル)」<https://www.fukuyama-kanko.com/travel/stay/detail.php?id=27> (2021年12月20日閲覧); 軻シーサイドホテル和のオフィシャルサイト <https://www.tomonoura.co.jp/> (2021年12月20日閲覧)。
- (117) シアターレストランのあるホテルが多い町のひとつに熱海がある。1964年に開業した「熱海静観荘」では、すでにシアターレストランのようなサービスがあり、同年熱海に開業した「ニューフジヤホテル」もそれにすぐ倣って、翌1965年にシアターレストランを導入したという。大久保あかね「熱海における旅館業の成立と発展」『熱海温泉誌：市制施行八〇周年記念』、p. 149.

#### 〈参考文献〉

- 朝日新聞社編 (1977) 『日本の宿— Where to lay your head in Japan』朝日新聞社
- 石倉豊編 (1972) 『最新全国ホテルガイド』実業之日本社
- 大久保あかね (2017) 「熱海における旅館業の成立と発展」『熱海温泉誌：市制施行八〇周年記念』熱海市、pp. 142-149
- 河村英和 (2021) 「1960-70年代の日本のホテル建築について」『戦後昭和の建築—その価値づけをめぐって (2021年度日本建築学会大会 (東海) 建築歴史・意匠部門研究協議会資料)』、日本建築学会、pp. 93-98
- 河村英和 (2022) 「昭和30年代のホテル建築の特徴について」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第33号、pp. 25-57
- 木村吾郎 (1994) 『日本のホテル産業史』近代文芸社
- 木村吾郎 (2006) 『日本のホテル産業100年史』明石書店
- 国際観光設備協会編 (1960) 『観光設備シリーズ 第5巻 (建築設計)』井上書院
- 重松敦雄 (1966) 『ホテル物語：日本のホテル史』柴田書店
- 清水組編 (1936) 『ホテル建築図集』清水組
- 砂本文彦 (2008) 『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社
- 創立30周年記念出版編集室 (1980) 『日建設計の歴史1900-1980』日建設計
- 大成建設株式会社 (1964) 『HOTELS Constructed by TAISEI』大成建設株式会社
- 富田昭次 (2006) 『ホテルの社会史』青弓社
- 竹中工務店七十年史編纂委員会 (1969) 『竹中工務店七十年史』株式会社竹中工務店
- 東急ホテルチェーン編 (1990) 『東急ホテルの歩み』東急ホテルチェーン
- 日活株式会社 (1962) 『日活五十年史』日活株式会社
- 日刊建設通信社出版部編 (1959) 『実用建設名鑑：1959年版』日刊建設通信社
- 日刊建設通信社出版部編 (1963) 『実用建設名鑑：1963年版』日刊建設通信社
- 原勉 (1961) 『ホテル旅行』秋元書房 (トラベル・シリーズ)

#### 〈新聞・雑誌記事〉(時系列順)

- 「赤城ロッヂ開設」『観光情報 (82)』1956年12月号、p. 19.
- 東武興業株式会社「光徳ロッヂ・赤城ロッヂ」『新建築』1958年2月号 (33)、pp. 34-44
- 柳建築設計事務所「旅館 鬼怒川温泉ホテル」『建築文化 14(10)(156)』1959年10月号、pp. 33-37
- 柳建築設計事務所「鬼怒川温泉ホテル」『近代建築 13(10)』1959年10月号、pp. 30-36
- 芦原義信建築設計研究所「ホテル：日航」『近代建築』1960年3月号、pp. 25-41
- 芦原義信建築設計研究所「ホテル日航」『建築文化 15(3)(161)』1960年3月号、pp. 5-18
- 坂倉準三建築研究所「白馬東急ホテル」『建築文化 15(3)(161)』1960年3月号、pp. 25-31
- 三橋謙一「新設の白馬東急ホテル拝見」『ホテルレビュー 11(120)』1960年4月号、pp. 8-11
- 入江雄太郎「熊本ホテルキャッスル」『近代建築 14(12)』1960年12月号、pp. 59-66
- 西武鉄道建築課「西熱海ホテル」『近代建築』1961年7月号、pp. 102-105
- 掘田英二建築設計事務所「大洗パークホテル」『建築文化』1961年10月号、pp. 95-100



新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて

- 吉江憲吉設計事務所「ホテル・マウント富士」『近代建築 17(9)』1963年9月号、pp. 81-94  
「30人がヤケド 雲仙で突然、温泉吹く」『読売新聞』夕刊、1963年9月5日、p. 7  
「1人は死ぬ 雲仙の熱泉噴出事故／長崎県南高来郡小浜町雲仙」『読売新聞』朝刊、1963年9月6日、p. 15  
村野森建築事務所「名古屋都都」『近代建築 17(11)』1963年11月号、pp. 21-36  
佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟」『近代建築 17(11)』1963年11月号、pp. 39-56  
村野・森建築事務所「名古屋都ホテル」『新建築 38(11)』1963年11月号、pp. 101-110  
佐藤武夫建築設計「ホテル新潟・料亭万代」『新建築 38(11)』1963年11月号、pp. 111-124  
森京介建築設計事務所「土浦京成ホテル」『近代建築 17(12)』1963年12月号、pp. 85-92  
志賀設計「作品 日名子ホテル」『近代建築 18(4)』、1964年4月号、pp. 61-66  
村野・森建築事務所「名古屋都ホテル」『新建築 39(11)』1964年11月号、p. 190  
吉村順三「京都国際ホテル」『新建築 39(11)』1964年11月号、p. 191  
靖建設計事務所「今月の建築 ホテル雄琴」『近代建築 19(9)』1965年9月号、pp. 136-137  
多賀谷義雄「雲仙九州ホテル—地獄の湯煙に立つ近代的装い」『月刊ホテル旅館 (3)』1966年3月号、pp. 17-22  
菊竹清訓建築設計事務所「佐渡グランドホテル」『新建築』1967年11月号、pp. 165-174  
「ホテルブルーきのさき（設計・三田建築設計事務所）」『近代建築 23(2)』1969年2月号、pp. 133-138  
根津建築事務所「作品 ホテル奥道後」『新建築 44(7)』1969年7月号、pp. 207-221  
「西鉄グランドホテル（設計・浦辺建築事務所）」『近代建築 23(8)』1969年8月号、pp. 87-94  
「西鉄グランドホテル（設計・浦辺建築事務所）」『新建築 44(8)』1969年8月号、pp. 159-174  
荒井信夫「大月ホテル新館〈熱海〉」『月刊ホテル旅館 (6)』1969年10月号、pp. 88-89  
ブルドーザー工事「宝塚グランドホテル」『近代建築 24(2)』1970年2月号、pp. 105-108  
「千里阪急ホテル（設計・浦辺建築事務所）」『新建築 45(6)』1970年6月号、pp. 178-182  
平島二郎「奥志賀高原ホテル」『建築文化 26(294)』1971年4月号、pp. 145-150  
「京王プラザホテル」『近代建築 25(7)』1971年7月号、pp. 65-71  
日本設計事務所「京王プラザホテル」『建築文化 26(297)』1971年7月号、p. 75-86  
「軀シーサイドホテル」『月刊ホテル旅館』1971年8月号、pp. 39-41  
「隠岐プラザホテル」『月刊ホテル旅館』1971年8月号、pp. 42-44  
「ホテルパシフィック東京（設計・坂倉建築研究所）」『新建築 46(9)』1971年9月号、pp. 151-170  
「ホテルパシフィック東京（設計・坂倉建築研究所）」『建築文化 (299)』1971年9月号、pp. 98-106  
西沢文隆「ホテルパシフィック東京のデザイン構成」『新建築 46(9)』1971年9月号、pp. 168-169  
「日活ついにホテルなし 最後の「小倉」も譲渡へ」『読売新聞』1972年2月2日、p. 6  
竹中工務店「ホテルグランドパレス」『近代建築 26(4)』1972年4月号、pp. 87-92  
斎藤武「鬼怒川ロイヤルホテル」『月刊ホテル旅館 9(4)(100)』1972年4月記念特大号、pp. 38-40  
設計は、東海興業 K.K. 設計部による。東海興業 K.K. 設計部「函館国際ホテル」『建築界 21(6)』1972年6月号、pp. 37-45  
「博多都ホテル（設計・日建設計）」『新建築 47(11)』1972年11月号、pp. 193-204  
黒川紀章建築都市設計事務所「下田プリンスホテル」『新建築 48(9)』1973年9月号、pp. 243-250  
上川中部消防組合消防本部「ホテル大雪火災」『防火 (24)』1974年11月号、pp. 44-47  
「近鉄、宿泊客の増加に対応、四日市都ホテルの建設に着工。」『日経産業新聞』1975年10月29日、p. 8  
「遠鉄観光開発、館山寺遠鉄ホテルを全面改装—53年4月に新装オープンの予定。」『日経産業新聞』1977年11月2日  
「阪急電鉄の天橋立ホテル新館がオープン—丹後開発が運営を担当。」『日経産業新聞』1978年7月6日、p. 10  
「突然閉鎖の小倉キャッスルホテル、資産ゼロで身動きとれず—求むスポンサー。」『日経産業新聞』1980年10月31日、p. 9  
「日航ホテル、都市再開発で川崎ホテルを駅寄りに移転し客室3倍の200室に建てかえ。」『日経産業新聞』1981年5月19日、p. 15  
「全館使用禁止に ニュージャパン／ホテル・ニュージャパン火災」『読売新聞』夕刊、1982年10月1日、p. 1  
「南海電鉄など3社共同出資による『ホテルグリーンヒル白浜』が5日オープン。」『日本経済新聞』近畿 B 地方経済面、1983年2月18日、p. 10  
「グランドホテル仙台、『ホテル新設組』に押され閉鎖。」『日経産業新聞』1983年4月1日、p. 14  
「京都ステーションホテル、ホテル戦争激化に対応し全面建て替えに。」『日経産業新聞』、1983年7月27日、p. 15  
「ホテル新增設ラッシュ、陰で買収劇—全国チェーン、経営不振の中小を系列化。」『日本経済新聞』朝刊、1983年8月18日、p. 11  
「葉山マリーナ、装い新たに営業再開—再開発の第1期工事完了。」『日経産業新聞』1983年9月20日、p. 11  
「『川崎日航ホテル』、20日オープン。」『日本経済新聞』首都圏版、1983年11月17日、p. 5  
「大洗パークホテル、新館に国際会議場—科学博での利用見込む。」『日経産業新聞』1985年1月10日、p. 13  
「別府の旅館・ホテル業界、宿泊客減で苦境に。」『日本経済新聞』九州 A 地方経済面、1985年10月18日、p. 13  
「ニュー長崎ホテル、きょう改築に着手—ニューオータニが運営指導。」『日本経済新聞』九州版、1986年3月19日、p. 13  
「高倉商店、ホテル経営、『サンルートニュー姫路』一買収し、新装オープン。」『日経流通新聞』1987年3月9日、p. 8  
「ホテル新潟、新装し完工式。」『日本経済新聞』新潟地方経済面、1988年4月15日、p. 22  
「札幌でホテルが個性磨く—今、開業ラッシュ（消費最前線）」『日経流通新聞』1989年2月11日、p. 1

- 「京都ホテル、60メートル計画実現へ『景観破壊』と仏教会【大阪】」『朝日新聞』朝刊、1991年2月15日、p.28
- 「箱根観光ホテル合併 パレスホテル」『朝日新聞』東京版朝刊、1991年5月2日、p.11
- 「ダイエーの財務戦略、5年で負債3000億円削減—中内功社長が表明。」『日経流通新聞』1992年8月4日、p.7
- 「課長の出張費でも大丈夫、藤田観光、ホテル1泊6000円程度。」『日経産業新聞』1993年8月4日、p.18
- 「東急ホテルチェーン、白馬東急ホテル客室大型化へ改築。」『日経産業新聞』1994年8月31日、p.21
- 「営業終える 広島グランドホテル」『朝日新聞』広島版朝刊、1994年11月1日
- 「千代田生命、ホテルニュージャパン解体、日本国土開発と契約—更地で売却へ。」『日経産業新聞』1995年11月1日、p.2
- 「住専マネー闇へ（破綻の構図 住専・不良債権を追う：5）【名古屋】」『朝日新聞』朝刊、1996年7月6日、p.26
- 「東海観光、香港企業が買収—第三者割当9月に実施 51.6%株式を取得。」『日経産業新聞』1997年6月13日、p.15
- 「京都プラザ、複合型ホテルを建設、『ホリデイ』一部建て替え—核店舗にイズミヤ。」『日本経済新聞』京都・滋賀地方経済面、1998年5月19日、p.45
- 「ホテルマウント富士、17日改装オープン—客室倍増、会員制も。」『日本経済新聞』山梨版、1999年7月9日、p.25
- 「名古屋都ホテルの閉鎖発表 駅前でも集客厳しく 開業50年ギリギリの決断」『読売新聞』中部版朝刊、1999年7月24日、p.34
- 「磐梯グランドホテル閉鎖、名鉄、来年1月末で一収支改善見込めず。」『日本経済新聞』東北B地方経済面、1999年9月10日、p.24
- 「銀座東急ホテル閉鎖、跡地に時事通信本社」『朝日新聞』朝刊、2000年2月26日、p.13
- 「自己破産を申請 琴電グループの『高松グランドホテル』」『朝日新聞』香川版朝刊、2001年8月29日、p.31
- 「名鉄、9月中旬見通し、最終赤字31億円。」『日本経済新聞』中部地方経済面、2001年10月16日
- 「東急グループ、『東急ホテルズ』にチェーン名を統一。」『日経産業新聞』2001年12月25日、p.19
- 「三井不動産、銀座三井ビル解体、築30年で老朽化。」『日経産業新聞』2002年5月20日、p.21
- 「札幌東急ホテル、30年の歴史に幕。」『日本経済新聞』北海道版朝刊、2002年12月16日、p.38
- 「博多・城山ホテル9月閉鎖 施設老朽化 建て替えも検討／鹿児島」『読売新聞』西部夕刊、2003年7月5日、p.11
- 「名古屋鉄道、子会社ビルを来春閉鎖。」『日本経済新聞』中部地方経済面、2003年9月6日、p.7
- 「札幌プリンスホテルタワー、4月24日開業。」『日経MJ（流通新聞）』2003年10月23日、p.2
- 「近鉄系ホテル『池の浦荘』が惜しまれ閉鎖 二見町」『朝日新聞』三重版朝刊、2003年4月1日、p.30
- 「日本エスリード、兵庫県宝塚市に分譲マンション。」『日経産業新聞』2004年4月2日、p.13
- 「ホテル池の浦荘、『旅草海の蝶』で再開へ 和歌山の旅館が買収＝三重」『読売新聞』中部版朝刊、2004年4月3日、p.27
- 「東急ホテルチェーン、羽田エクセルホテル12月開業（情報プラス）」『日経産業新聞』2004年6月4日、p.23
- 「ホテル『キャピトル東急』を建て替え 複合ビルで開業へ／東京・永田町」『読売新聞』東京朝刊、2005年8月27日、p.8
- 「十八銀行がホテル再生事業。」『日経MJ（流通新聞）』2006年4月7日、p.9
- 「4ホテルの売却先発表 伊豆箱根鉄道」『朝日新聞』静岡版朝刊、2006年8月11日、p.23
- 「土浦京成ホテル閉鎖、来年3月末、披露宴など低迷。」『日本経済新聞』茨城地方版、2006年10月25日、p.41「九重レークサイドホテル、9月末に閉鎖」『朝日新聞』朝刊、2007年3月3日、p.13
- 「博多東急イン38年の歴史に幕、最後のお客様見送る—『宿泊450万人に誇り。』」『日本経済新聞』西部夕刊、2007年5月16日、p.20
- 『建築画報：VA（Visual Architecture）』2008年3月号（vol.44:328）KKS特集号
- 「パレスホテル建て替え、11年末開業、ホテル・オフィス2棟に。」『日本経済新聞』朝刊2008年5月2日、p.10
- 「札幌ロイヤルホテル月末閉鎖。」『日経MJ（流通新聞）』2008年6月11日、p.9
- 「洲本温泉、新装・改装ラッシュ スロー売りに集客アップ＝兵庫」『読売新聞』大阪朝刊、2009年1月20日、p.30
- 「東急不、熱海にマンション開発、全室、オーシャンビュー。」『日経産業新聞』2010年7月13日、p.16
- 「横浜エクセル、来春営業終了、3月末、跡地に高層ビル。」『日経MJ（流通新聞）』2010年8月30日、p.15
- 「ソラーレホテルズ、ホリデイ・イン京都を『ホテル アバンシユール京都』にリニューアル」『日経速報ニュースアーカイブ』2010年11月10日配信
- 「ブルーきのさき 破産へ」『読売新聞』大阪夕刊、2011年1月19日、p.10
- 「旧小倉ホテル 再開発 店舗、マンションのビルに 12年度未完成」『読売新聞』北九州西部版朝刊、2011年2月1日、p.27
- 「京急、『シナガワグース』29日開業、テナント21社出店。」『日経産業新聞』2011年4月22日、p.12
- 「ホテル層雲、事業停止、震災で利用減、従業員解雇も。」『日本経済新聞』北海道版、2011年9月3日、p.1
- 「京成電鉄、犬吠埼ホテル売却、来春、千葉の三セクに。」『日経MJ（流通新聞）』2011年12月14日、p.7
- 「『買収の旧天翔、開業は10月に 野口観光／北海道』」『読売新聞』朝刊、2012年7月11日、p.30
- 「熱川第一ホテルが破産手続き開始へ＝静岡」『読売新聞』東京朝刊、2012年9月21日、p.28
- 「駿河湾や静岡の街並みを一望、日本平ホテルが開業。」『日経MJ（流通新聞）』2012年9月24日、p.11
- 「京都国際ホテル、営業終了へ」『日経MJ（流通新聞）』2013年10月21日、p.11
- 「ホテルニュー薬研に幕 半世紀の歴史 宿泊客から惜しむ声＝青森」『読売新聞』2016年11月8日、p.30
- 「ホテル、耐震性公表の荒波、安全優先、淘汰始まる」『日本経済新聞』朝刊、2017年2月26日、p.10
- 「パレスホテル箱根 老朽化で来年閉館＝神奈川」『読売新聞』東京版朝刊、2017年3月7日、p.26
- 「金沢都ホテル54年で幕＝石川」『読売新聞』東京朝刊、2017年4月1日、p.23
- 「ナゴヤキャッスル 元の名に『ウェスティン』契約終了」『読売新聞』中部版朝刊、2017年5月19日、p.8



新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて

- 「小倉ホテル解体、広場に、市が19年春整備、住友不動産と合意。」『日本経済新聞』九州地方経済面、2017年8月9日、p.13
- 「近鉄不動産と近鉄・都ホテルズ、福岡市博多区の『(仮称)近鉄博多ビル』新築工事に着工」『日経速報ニュースアーカイブ』2017年10月5日配信
- 「名鉄、犬山ホテル建て替えへ。」『日経産業新聞』2018年6月6日、p.13
- 「札幌パーク『ヒルトン』に建て替え23年開業＝北海道」『読売新聞』朝刊、2019年3月29日、p.27
- 「旧西鉄ホテル跡地に大分中村病院移転へ 23年度中の開業めざす」『朝日新聞』大分全県版朝刊、2020年3月12日、p.25
- 「名古屋城望むホテル建て替え ナゴヤキャッスル、10月から休館」『朝日新聞』朝刊、2020年6月11日、p.6
- 「名古屋の老舗2ホテル、半世紀の歴史に幕」『日経速報ニュースアーカイブ』2020年9月30日配信
- 「京都の高級ホテル、コロナ禍でも続々 三井初の最高級11月開業」『日経速報ニュースアーカイブ』2020年10月29日配信
- 「グランドパレス、6月末に営業終了。」『日経産業新聞』2021年3月4日、p.13
- 「阪急阪神ホテルズ、6施設営業終了へ、街の再開発に合わせて活用。」『日経MJ（流通新聞）』2021年8月15日、p.7
- 「高級ホテル建設に20億円補助 愛知県と名古屋市、発表」『朝日新聞』朝刊、2021年9月14日、p.6
- 「お別れ前に『アリガトウ♡』シナガワグース 来月から解体、窓で文字＝東京」『読売新聞』東京版朝刊、2021年10月25日、p.25
- 「ホテルニューアカオ、営業終了 コロナ禍、需要回復見込めず 熱海」『朝日新聞』静岡県版朝刊、2021年11月19日、p.23